

当世商人気貨

谷庭屋郎

一の巻

第一

我手に鹽を踏み固めた身代の講釋
無理は内義が盛たいての歎き
餘所に吹く風身にしみる親の慈悲

商人に系圖なし。金を以て氏筋目とす。抑も是は桓武天皇九代の後胤平の知盛の末孫なりと名乗つて白柄の長刀水車の如くに廻しても盆と暮との二季の戦場に槍くりといふ打物を敵に取られては幽霊の縁をひいてドロンと消えるより詮方なく先祖は龍宮へ渡つた藤太秀郷でござるど肩胛をいからした處が俵の底を叩いても米一粒なき仕合せでは三上山を七卷半も巻くほどな酒屋魚屋の書出しを見て百足に草鞋足早に驅落するより外に策なし正一位に陞つた家の落胤と誇つても埃に埋む四辻に稻荷壽しの店を出しては身代の尾が見えて貴からずたとへ昔しは街道にたふずみし雲介なりとも儲け出して富豪の身となれば肩に殘つた荷物癌までが福相のうちと稱さるゝものぞかし左れば商人の目ざす的

の黒星は金といふ字に止めたり穢ぎの上には何を仕やうと耻にあらざど眞黒になつて木挽町に炭團屋をして夫婦共稼ぎの山形屋萬助といふ者がわづか二十年経つか経ぬに入丁堀邊へ立派な質店を出し角から抵り廻して地面三ヶ所土藏の地形も千萬平を期して堅牢地神の頭まで届くほど深く石を築き込み動きなき身代と人に稱せられて御蔭を蒙ぶらぬ者までが旦那々々と崇めるを見やう見真似に横町の洋犬までが尾を揺つて愛想するは諸も金の威徳の有難や是につけても鹿末にすべくに非ずと身代が太るほど活計向きを細くさるゝは節儉の垣根を超えて客齋の園ひ内へ入りたりと人の蔭言よくは云ひたがらぬ世の癖と聞ても知らぬ顔で通しけり獨り子の千太郎と云は父にも母にも似ぬ色白の優形にて生れつき情深く乳母下女はじめ召仕ひに憫れみを加へければ出入る者も有難がり梅檀は二葉あ十一にし敬すれば親の心はいかばかり嬉しからん片輪なるさへ褒めらるれば悪き心はせぬものなればと萬助の氣を推

し量つて傍の者が云ふとは大きな違ひ萬助は我子が年
にきせて慈悲深き行爲を見て密かに眉をひそめ折角は
まで稼ぎ出した身上も彼の心入では能く持堪へはせ
まい諸も苦々しい事ぞと咄やきしが千太郎は或時乳母
と共に店へ出て遊んで居るとき猿曳が來たりてへい御
目出たうと店へ猿を下せば可愛らしき猿が躍りなが
ら千太郎の傍へ行くと糊入へ包みて手に持ちたる上等
の干菓子これを遣らうぞと猿に投げ與へしを見て店の
者共は借も大氣なお生れやと稱賛するに引かへ萬助は
顔色かへて奥へ立ちぬ
我子千太郎が猿に干菓子を投げ與へしを見て萬助は急
に奥の間へ來て別家同様に置いて置く深川森下邊の伊勢
屋仁助といふ小質屋の主人を使ひて呼び寄せ諸貴公に
少し御頼みの筋が有ると申して別の事ではござらぬ俸
千太郎豊かなる中に育ちて錢儲けの苦しみを知らず先
程も店へ來た小猿にまだ我等などは口へ入て味はふて
見た事もない上菓子を投げ與へたる所傍の者は大氣の
鷹揚のと申せと我等の目から見れば是ほど冥利に外れ
たる事はなし甘く育てゝは辛き世渡りはならぬ三子の
魂百までと申せば彼がちと錢金の有難味を知るやう
に貴公方で丁稚代に二三年使ふて下され尤も我等俸と

思ひ用捨せられては何の爲にもならぬば随分厳しく追
廻し使はるべし貴公方も當時さし當り召使も入らぬと
こゝろ強て頼み申す譯なれば月々食扶持として金二圓
外に小遣湯錢等に五十錢づゝ送るべし何分よきに頼む
と有るに仁助も驚き兎角の返答もなし兼ねて頭を掻く
うち萬助の女房も角は涙を押へかねて夫の方へ膝突掛
け何と思はれて左様急に無慈悲な事は仰有るぞ少しば
かりの菓子猿にやればとて夫を奢りの冥利に外れる
のと云ひたまふ事かは殊に千太郎は脾弱き質丁稚がは
りに使はれては生命に障らうも知れませぬ悪い事有
らば幾重にも詫びませう手許を放す事はお免しあれど
云へど萬助は目に角立て貴様も最う今の身の上に馴れ
て昔しの事を忘れてか其心得ぬ志俸をば彼の様に育て
上げたので有らうよく聞けよ奢りといふに何處から何
處までと區限はない用ひ所によりては椿一輪を十圓で
買うと蜜柑十で百圓出そうと強ちに奢りとは云はず左
れと我等が分際で華族方の若君が召上るほどな干菓子
たどへ貰ひ物にもせよ平生口になづみ目になれて居れ
ばこそ惜氣もなく猿に投げ與ふるなれ夫も先がよい家
の子供たちなら別義はないが人參の尻尾を常食にする
猿にやりしが奇怪なり斯く奢りくせの付きし者教訓を

加へたりとて自ら苦しみて見ねば直らぬものゆゑ彼が行末の爲を思ふて仁助殿に頼む事ぞまた脾弱ゆゑ丁稚奉公させたらん生命が堪るまいとは以ての外の心得違ひ商人が家業の道を覺ゆる爲めに死んだなら夫こそ武官の方々が戦場の討死と代らぬ警れ我家に召使ふ丁稚子者も其の母の目から見れば御身が千太郎をかばふと同じにていづれも手放して他人の中へ出してはいかなる憂目を見るで有らうと歎くは當然されど其處を忍ぶが修行といふものなり木馬で習はせたらばかりにては口強き生た馬に乗れず痛はし悲しと思ふて家に置いては爲にならぬ我も千太郎を可愛と思ふこといかで御身に劣るべきや悪くはせまじ黙ッて居よと窘めける

仁助はやをら座を進め千太郎殿に世渡りの險しさを學ばせんの思し立ち流石は愛に溺れぬ御氣質は感服仕つります去ながら監を離ませるの世間を見せるの申すは親の油汗で稼いだものを湯水と遣ひ散す放蕩者の上のこと千太郎殿は行儀大人しく常からの御孝心丁稚から塗り上げずと木地の堅い御生れ付き天晴此家督を曲みなく御受繼なされる事は私しが印形捺して御受合申します母御様も仰有る通り天にも地にも掛替なき若旦那ならはぬ下司業に御病氣でも出ては大變畢竟貴君が

此の御身代を斯やうに御丹誠になつたは御自分一代の事ではなく御子孫の爲めに御苦勞もなされたのでござりませう千太郎殿に凶事もあらば是までの御骨折は皆な無益事と成りませうと理を盡して止むれど萬助は頭を振ていつかな聞かず貴公は其の心入れて渡世さるゝかイヤサ妻子に樂をさせやうとの勵みばかりで家業に精出さるゝか左りとは商人の本意を取失ひたる口上近ごろ貴公に似合しからず身代仕出すは妻子々孫の爲めなりと云はい妻も子もなき獨身者は一生自分だけ食て通れば夫で商人の一分を盡したものの家藏を持固めて跡へ殘すは入らぬ土持でござろう歟抑も商人と身をなし

ては自分の榮耀子孫の爲めばかりに利を争ふにあらず息有る間は一錢も多く儲け溜め一尺も擴く間口をせん

と勵むが商人の本分にしていづれも無益に棄てず一厘も入らぬ所に費やさぬが冥利を知るといふものなり貴公は兼て聞知つても坐さん我等夫婦は遠國より元手もなくて此の地へ來たり日儲稼きより少しづつ儲けためて木挽町へ炭團屋を出し夫婦ゆつくりとは鼻息もせず夜はまた粉によぐるゝ温艶賣り晝夜黑白に稼げども驚を鳥と無理非道はせず正直を看板に勉めたる甲斐あつて年々に儲け溜め今は此の身になつたれどまだ南の窓へ

枕して長々と晝寝一度した事はござらぬ樂をしたいは人の情なれどそれを堪へるは亦人の勤めなり一人怠たれば家内中の怠たり奢りは尙ほうつるが早し此まゝ千太郎の奢りくせを棄置けば當人は勿論後には我家に勤め居る者までの毒なれば皆こそまばし可可愛さを棄て貴公にお頼み申すなれば角も末の涙を今溢ぼして碎の後來を祝へかしと直に千太郎を呼んで木綿物の衣類に着替へさせ仁助に連れ立ててやりたるは皆も氣強き親御と誇るあれば商人の心入れは誰も斯くこそ有りたけれと褒むるも有るは人の心の取々なり

第二

人こそ知らぬ内證の繰廻に沖の石
かへく問もなき脈管のなみだ雨に
水溢まさりて防がれぬ流れの質物

質といふもの誰が置き初めて流れの末を止めあへぬ恨をば世に残しけん其の品々は馬琴翁の質屋の庫に盡したれば今さら利上げの小繕ひも未練に似たり左れども此業には大ひなる高下ありて高きは外國の鑛山を質に取つて政府へ金を貸す西洋の大質屋亦は華族の商法に丈夫を得得の安利貸百圓以下は御斷わり申し候といふ向もあれど下りての下に至りては五錢三錢付く付かぬを争ひて客と組打をするがの通ひかめいは伊勢屋これ

で苗字が片岡ならんぞんた四天王の口上茶番芝居の書割めいた云譯ばかりの板倉も中は行き抜け品物は取ツたか見たかに小僧が脊負出し親質へ送ればホンの遺線の中宿に借直の夢をみるのやうな衣服部部か魂膽か一炊の代に眩ならずして入用の道具を曲げる職人あれば瑞齒やむ老女が片手は涙片手には鍋を擡げて今ま孫めが驚風で死にましたが悴は旅へ稼ぎに出て歸らず嫁は内職の鼻緒を精出し過て指を脹し左りの手は利かぬ腦みさし當り線香も枕團子も買へぬ始まなれば御無理ではござりませふが御慈悲にこれで十二錢貸して下されと手を合して拜ねばかり主人は算盤の手も止めずして其の鍋は何時六百より貸されぬ代物お前の孫が死んだとて五錢六錢貸し過しをして流されては此方が助くらぬどう陷み直しても七錢よりは付きませんと跡はいくら口説も取合はねば婆は湯汁を嚙りながら我がしめて居た木綿のクタクタ帯を解いて鍋に添へ漸やく十二錢借りて歸る左りどは憐れな有様實に氣が弱くて出来ぬものは丑の刻参りと小質屋の主人なり萬助の碎千太郎は親の云付に是非なくも仁助の家へ來ての小僧代り身の苦しさ辛さは厭はねど毎日來る質置きたちの餘り氣の毒なのを見て涙たもち兼ね仁助に向ひて誠に御面

倒ではござりませうが乳母の所までやる手紙を一通お書きなされて下されと言へば仁助は顔を打守り夫は定めて此家に居るが辛いゆゑ御家へ歸りたいとの文言でござらうが爰をよく御合點なされませ親旦那様とて貴君を憎んで私方へ遣されたのではなく全く修業の爲めなれば辛いと思ふを堪へ玉ふが御孝行私方にてもお痛はしくは存ずれど親旦那が深きお頼みゆるわざと他人の小僧並に使ひ立てるを悪しくは思召さぬものと諭せば千太郎はホロリと溢し否々此家が辛いとの手紙にてはなし先ほど參た婆さんのような質置達が餘り不便でござりますゆゑ乳母より金を貰ふて彼の人たちに欲がるだけづゝ遣たうござりますとしやくり上るぞいぢらしき

心につるゝ姿とて此の仁助の女房あたけといふは本所邊に住ひし舊幕旗下の妹なりしが仔細あつて屋敷を出で此の仁助と夫婦になり始めは固き結び帶も崩せば馴るゝ世帯女房今は親里の者も散りゝに行方知れずなりたれば此の家を大事と思ふ心一層強くなるにつれて始末氣も深くひすこいは女の性分と云ひながらだんだん各畜になるに習ふて悻爲吉も母まさりの勘略者父親仁助をさへ帳合の上ではやりこめるほどなるがあたけ

は今ま千太郎が涙ながらに仁助に頼む事を傍聞して聲高く打笑ひ此子とした事が飛だ我儘はッかり追が萬助様は一代に彼の身上にならるゝ程あつて御眼は水晶此様な無理を云るゝを直さう爲めに此方へお預けなされたはよい御分別コレ千太郎殿も聞なされお前は萬助様が御身代を仕出された後に生れ富貴にお育ちなされたゆゑ世の世智辛い事を御存じ有るまいが貧乏人といふものはいづれも隣れ氣の毒ならぬ者はなくお前のやうに一々それに涙を溢しては海の水を逆さにあけても足りませぬぞ五十錢といふは三十錢一分といふを二十錢に踏み落し隨分念を入れて付けてさへ流れた跡で調べに見ると大きな損のゆくことは度々情ない話を聞たびに合力の心を加へて云ふまゝに貸して御覽なされ忽ちまゝ身上は潰れて此方が身軀に括を纏はねばなりませぬお前は十二の年弱此方の子の爲吉は十三なれど其の丁簡は雲と泥旦那殿もお聞なされ此方の爲吉の發明さ昨日も三圓だけ錢買ふて參りませうと云ふゆゑ有る餘らぬ店の錢を持ち出して何にすると問へば今ま角の湯屋で錢を兩替にやりたいが手間が掛る一錢打で買ふ者はないかと頭を掻いて話して居たを聞かした直を押したら三圓で四錢は打ちませう家へ来る質置に纏まつた

札を欲しいといふものもなければ四錢でも上儲けと直に駆け出して行ッて四錢打歩を取ッて錢に換へて來たさへぬかりのないと思ふに間もなく裏の車夫の内儀が來ておむづかしながら此の紙幣を小さいのと換へて下さりませといふと直に錢を渡して切賃とで一錢跳ねた手際大人も及ばぬ縁り廻し育ちも育ちがら商人に生れ付いた働きの者慰みに質を取るやうに思ッてござる千太郎殿とは大きな違ひお悦びなされ此方も私も年寄ッてから樂をする身になりませう誠に比べて見る物がなくては善い悪いは判然と分らぬ千太郎殿の我儘を聞いて此方の爲吉の利發が知れたチト褒めてやつて下されと鐵漿のはげた齒を剃出し涎をたらし眼を細して餘念なげの我子自慢母親の心は何處も斯したものと見たる女房お竹が我子の自慢するを聞いて仁助は赤面の汗を背中へ流し倍々貧富の差別といふ者は是れにも變る者か口惜しや我とても橋の下に縮みて居たではなく萬助殿とて大名高家の落胤でもなし同じ身柄の同じ商人氏素姓にかはりはなければ只金の有ると無いで斯ほどの違ひ俸も女房も爰へ出よ賢こそうに身の耻を並べ立て千太郎殿を嘲けるは何事ぞや悉皆鼻かけ猿が眞猿を笑ふと同じで聞く己が穴へも入りたい千太郎殿が

今ま云はれた詞昔しの仁者賢君と等しい情の志ざし成ほど人は氏より育ち我等とても有餘る身代ならば千太郎殿の云る通り貧しい人に施してやりたい人の憐を見ぬ顔で一厘二厘の利を争ふは本意ではなけれども左様してさへ緩やかに過ぎかねる世の中涙を腹の中へ溢して困強も云ふぞかしわづかの跳前を取るを手柄と心得俸も誇れば其方までが後から扇を立るとは左りとはさもししい心入れ其方も昔しは左ほどうしくもなかりしに境界につれて心も下りしか夫も是も貧なる我に連れ添ふゆゑと思へば一入無念なり其方は俸の今の行ひを見て末が樂ぢやと悦こばるれど我は又未はいかにと案じらるゝなり爲吉が此分にて成長せば相場事に掛ッてはたくか又は古着道具のいかもの商ひ正道には世を得渡るまい左りどてまた此様な者は東葉附木を提げて人の門脊戸に立つほどにも落ちぬもの連も大家の主となりて召仕を數多養ふの器量にあらず我等の運も知れたりといふべし夫に引かへ千太郎殿は富貴の中に育ちてひすい事が目に染みず持て生れた良心のまゝに情深く人の難儀を見かねて金やらうとの心入れさすが大家の子息なり萬助殿の身代を受繼いで彼の倍にも儲け出し玉ふべき福相總じて大きな身代をば持つ人は心

大きく慈悲が第一なり我等づれが及ばぬどころ斯る仁心ある子息を我等方へ預け置き玉ふは黄金を泥中に埋めるも同じ黒き色には染り易し早く白地で戻すに如む悲しひかな萬助どのも儲けの道には委しけれど得ると喪ふどの累ひに追はれて人の踏むべき仁義の道にうとし我等いかに中し解きて御前を御家へ歸しませういざ御支度なされ情も女房も身は陋しども心はかまへて清く持てよ慈悲といふもの心になければ人は食を爭ふ犬にも劣るぞと云ひ諭しつゝ身を起し千太郎を連れて八丁堀の萬助方へ出向き千太郎腹の御志し天晴感服の至りなり惡しきに馴れて移らぬうちお歸し申すと右の段々を述て同人を戻しける

第三

三五の二十掛合はね尊盤の玉の汗拭ふて取つた塵埃聖人顔の異見に禿頭を右左りへふるなの辯舌

富といひ貧といふ詞に左のみの違ひはなければ實際の上には富む者はまずく利便を受け貧しき者はいよいよ不便を蒙ぶりに氣の毒の淵をいつまでも出かねるものなり貧しき者は一日に手に握る金はわづかにして生活の上には富む者より一倍の高き物を拂ふ例之ば富む人は米薪を安き相場を見て大間屋より一時に多く買ひ

置けど貧しきものは割薪量炭を小賣より買ふうへ拂ひの時の危ぶみあれば二割も三割も高く賣り付られ味噌も醤油も品の惡きを高く買ふて此方から世辭をいふとは諸々合はぬと歎かば早く思覺して割のよい部類へ入るやうに心掛くべし富貴の利便は是れのみならず二階三階に四方を見晴し品川の海も富士の山も地代出さず到我庭内の景色に算へ込みソレ彼の高いのが淺草の五重の塔晴れた時には秩父の山々もよく見えますと覗き機關の口上めきて響應の中に加へれば客も手を打つて誠によい眺望氣の樂になりますと品物にしての挨拶夫には引かへ裏屋住ひの悲しさは借りた丈の地代を出し桃の木一本植ても隣の藏で陰となり座敷に居ては青空も見られず是ほどの邪魔をうけても迷惑と一言いはれぬは金の威光に恐れての弱身か子供の躰も誰教へねど自然と善惡の區別を爲すは争はれぬものなりと仁助は我身の上をはかなみ千太郎の仁心を褒めて萬助方へ送り歸せば萬助は鼻の上へ皺をよせてはや半年ほど御世話に預かつたがまだ嫌の不所存は直りませぬか其の仁心だてが否さに貴公にお頼み申したるなり御面倒では有るべけれど今しばらくはらく御世話下され其の情心が失せて儲け一方に固まるやうに頼み入るとの詞に仁助は額

へ青筋を出し、コレ萬助様夫は御本心より仰有る詞かいかに我々お蔭を受けて期く渡世は致すどて餘り見くびりたる御一言我等方へ千太郎殿を遣されたは無慈悲無情を習はせの爲めかイヤサ不義非道の教へ方には天晴相應の者ぞ某を思召してか左りとは情けなき御了簡其の御心入れの此方の子に千太郎殿が生れたは驚か鷹と申すべし、獨かみさへすれば商人の自分は盡したものでござるか總じて世の人のいとなみ千態萬狀にかはれども強ち金が欲しいばかりの目的ではなし、必竟金が欲しいといふは人にも施し我身もまた夫だけの樂しみを得んと思ふ故なり、其身も樂を享けず人にも施さず握り詰めて死なれたら定めて閻魔王へよい土産ならん、嗚呼金は世界の寶ならで罪と惡との塊り歟と疊を叩いて諒めたり

仁助の詞を聞いて萬助は阿々々打笑ひ了簡の違つたどは我等より貴公の事なり、其の不覺悟より、永年の間身上仕出しもせぜに毎年同じ泣言を云つて年を越さるゝと見えたり、貴公はむづかしき書物も讀まれ、いつも道理に中ることを云るゝに、似合はず渡世の覺悟に至りては甚だ疎かなり、然しそれも算盤を捨て學者の看板を掛けられての上ならば金は入らぬと云れうと袋へ錢を入れ

て門並施こして歩かうと儘なれど、唐棧の窮乏に年中前掛をはなされぬ出立にて其の了簡は大いに惡し、貴公は樂といふ字を只手足を伸ばして寝る事とばかり解し、玉ふか商人が息を切つて儲けの道に走るをたい樂が仕たい爲めの働らきと思ひなさるか我等は幼少より商賣の事に屈托してむづかしい書物は覗きもせぬと商人の本分は此處で有らうといふことは多年世を渡つて踏み知りました儲ける上にも儲けんと日夜撓まず稼ぐのが商人にて一足も退くなど進むのが兵士なり、我等でよいはと手をメめて自分も樂をし人にも惠まんと思れば其時がはや身代破滅の端緒なり、商業は死物にあらざ先へ出ねば跡へ下る少しも油斷すべからず、假に無常を觀ずべからず、貴公は我を聞けぬ知らぬ荒夷たい金にかがり付いて一生を送る守銭奴と思はれやうが我等はまた貴公等が情けの心があれど情の行ひなきを笑ふなり、慈悲や情は求めずとも斯して稼ぐうちに有るよく心して見玉へかし身代豐なれば出入の商人職人にも僞を云はず欺しを喰はせず、此方から書出しを催促して諸勘定を濟ませば盆にも喜にもヤツサモツサした事なく召仕のものもそれ〴〵に仕付け町内一般の物入には貧しい人の分も脊負ツテ立ち是れまで人に一文半錢も損をかけた

ることなし人は自分一人さへ過ぎかねて難澁する中に
 九人十人を安樂に遇すは大きな慈悲ではござらぬか店
 角に立つ物貰ひにわづかづの手の内を出し又は名聞
 ばかりの宮寺の奉納物それは善根とは云はれまします
 貧しく暮せば悪いとしりながら偽りも構へ人をも腹ら
 せ身も苦し徒らに人の儲け話しを聞て咽喉を渴かせ
 僻みの果は我身の不仕合の中へ人の幸ひを引き込まん
 どあせり他所のよい話しを聞けば腹悪がり人の難義に
 落ちるを聞いて悦ぶやうな魔界へ落ちますぞ困る人に
 物を恵むといふ志しは至極よけれど仕道が悪ければ善
 根とは云れず他人の頭の蠅を追ふより我が家業を大事
 にかげ傍觀をせず稼ぐのが廻り廻つては誠の善根と
 なるものなり貴公も先慈悲心を取置て儲け一方に精出
 されよとぞ諭ける

諸も味氣なき事を承はる物かなと仁助は萬助の顔をつ
 くく打眺めながら膝を進ませ誠や鹿を逐ふ獵師は
 山を見ず只算算勘にのみ凝りて儲けにあがき玉ふより
 斯の間違ひたる理屈を彈き出してよく合ひたりと思す
 ならんが世は左る無情のものに非ず御覽なされ天には
 清く月輝き地には梅櫻の咲き満ちて人の心を慰さむる
 を是も貴君の御目からは月は提灯が入らずとばかり梅

は實を取ることは花を鹽漬にするよりは見えまします
 い木で彫つた像でも朽ちる事あり況して人は鐵作りに
 はござりませぬぞ百年無事に持つは稀なり斯くはかな
 き世に立ちて向ふ見ずに慾面引ばり取るど遣るどに傍
 觀も觸らず人は糞とも味噌とも云へ金さへ溜めれば夫
 でよしとは餘り狭すぎる御了簡それで金を使ふでな
 く金に使はれて生涯を送ると申すもの云ふは憚り少な
 からねど貴方のやうに片時も肩を休める間もなく味よ
 きを食はず暖かに着ず眼の光り帳面の外を寫さず耳に
 は店の者の寄算を聞くより外の樂しみはなく齷齪とし
 て世を経たまふは富貴なれど貧賤に劣り金は有りとも
 無きに如かず必竟金といふものが無暗矢鱈と貴がらる
 るといふものは是を以て種々の樂しみ種々の物と換へ
 らるゝ故にて強ち是が家業の本尊にはあらず力及ばず
 は是非なけれど此ほどの御身代にて只召仕ふもの出入
 る者に御情あればとて夫で慈悲情を盡したりとは申さ
 れまじ詰るところ情といふは人の心の誠を云ふものに
 て志ざしさへあれば貧しき女の一燈は長者が點せし萬
 燈より光明はるかに勝れたりとか貧しきものゝ心ある
 を笑ひ玉ふは儲事なり最早御家も基礎固く此上にとあ
 せり玉はぬ方が却つて長久御繁昌の良策と存じます是

を固めるは仁心に如かず假令ば貴君は創業の君なれば武を以て烈しく働らき玉ふが當然なれば二代目は仁を以て懷けねば世は穢やかに参りません幸ひ千太郎殿の持つて生れた御仁心どの様に御悦びなされて此上ますく其心の陋しくならぬやう立派に御仕立もなさるべきに只商人は儲けねばならぬ仁心は捨て金欲しがれど仰有るは悉く親孝行する者にチト不孝せよ餘りやさしくしたら親が付け上つて止所はなからふと水をさすも同ことつらく世間商家の有様を見るに施して身上を潰したといふ例を聞かず有るが上にも積み上んとあせるよりして身代限りとなる者多し此等の事をよく考へ合せ玉へやと口を酢くして辯じたり

云掛りになつては萬助も止められずコレ仁助物議顔面てくれ成程世には結構な仁者多く人の難義を見て共に悲しがり餘所の頭痛を疝氣に病んでやらのゝは感服なりそれのみならず風流氣ありて月花の憐れを知り折に觸れては歌俳諧に想を述べ香茶の湯に靜を愛されてはますます感服なり而して後に身上を摺り破し先に其身が恵みたる貧者の仲間へ落ち入つてどうぞお助け下されど一門一家知己他人に迷惑を掛け玉ふはいよく以て感服なり妻子を路頭に泣かせ先祖の墓石まで取崩して

賣り玉ふは仁の極め風雅の骨とも稱しつべしいつも南風に吹れて居るやうなダリとした了簡には往來で子供が泣くを聞いても憐れを催し抱へ事の貧窮話に金をも恵む畢竟は自分の了簡に腕の續くだけ働らいてのけんどいふ勇氣なく食ふ物さへあれば餓餓するに及ばぬまづ緩くりと寝てこまそうといふ懶惰心より起るなり小仁は大仁の賊とやら彼の彼岸中に生るを放つといふ善根家が有るので雀は却つて網竿の災はひに遭ひなまなかの施しをされるより人を驅つて乞丐に落す人は自分で働らいて自分の始末をせよといふ手本を出す人少くなく生物識の瘦我慢心に鬼を作りながら佛顔するこそ片腹痛けれまた貴公は身上をよくせんとあせりて身代限りとなる者多しと云るれど是れ商人の身として更に傷むべき事にあらず勝敗は常の數なり儲けんとして損をしたたりとて忍るべからず北海大廻しの船へ資本も我が命も積み込み途中で難船して藻屑とならうと儲む處なし損するが怖くて商賣がなるべきや只商人の怖るべく慎しむべきは自然と身代の減る事なり一時の買掛りで千圓損したりとて氣を落すに足らざれど暮の總勘定に一圓喰込みしと見ば心を付くべし是れ商人の秘訣なり貴公と斯く論をするも無益各々思ひ込みあ

れば強ち我が云ふが理にもあるまじき争ひは爰に止めて
諸相談すべき事あり朝夕會席の膳に向ひては八珍も足
らずとするは人情にて馴れては美食も旨からず悴千太
郎も富貴に育ちて富貴に暮しては又富貴の有難さを知
るまじ随つて世の味ひも嘸知らず空々寂々且那樣で仕
舞ふは幸ひに似て幸ひならねば一まづ他人の中へ投り
込んで見んと思ふなりと打解けての話しに仁助も感心
し我等も御同意悴余吉を修行致させ申さんと互に約し
て別れけり

二の巻

第一

臨終の遺言き、過り芥子思ふに
これならぬと母親の手汗
握るに却て開け易し麻の初花

朝には紅顔に誇れども夕には白骨となつて消えぬと伏
紐たゝいてチンと澄した和尚も腹が痛むとて俄かに買
ひ藥を煎じさせ地震がすれば世直し萬族樂それでも搖
りが止まねば既足で庭へ駆け出して潰されぬ用心極樂
へ田地の買置して釋迦如来に請ふ頼んだやうな顔つき
でさへ斯くの如くに命は惜しきになして況んや平生二
一天作に屈托して其心構へなきもの卒去らばの際とな

れば狼狽周章半分は己が氣で死を早やめるものぞかし
光陰は走る箭の如くまた流るゝ水に似たり八丁堀に根
城を堅く構へ番頭手持持口々々を固め鎌倉勢百萬騎群
がり寄るにビクともせざりし千早金剛山の城廓も斯く
やと思ふばかりなる伊勢屋萬助節季々々の拂ひ書出し
は見事に勘定して遣はるることなかりしも歳といふ借金
追々に嵩み是を返済するの智謀は歸にも及ばず枕を破
ッての勘略も其甲斐なくして終に借の形に二つないも
のを取られて尊い所へ起むかれぬ。臨終に悴千太郎を
近く呼び黄なる涙を流して呉々も質素儉約を守り家業
大事を怠るべからずと遺言せられたる一期の別れ親子
の愛情千太郎自身にこたへ是より今までの應揚なる性
質サラリと變り親父萬助に輪をかけてた吝嗇となり朝は
疾から起きて自身臺所を見廻はり釜の下の焚木が多い
コレ／＼三や大根の葉が拾つて居る水をかけて干して
漬けソレ／＼紙屑があるではないか夫を井と共に掃く
ことか紙屑籠へ入れよと蚤取腰にて細かく氣を付け年
は二十一の男の花よりなれど着る物は親父のを直した
喜天の怪物さて／＼變れば變るものも雇人一同我を
振りて成るたけ千太郎の睨みに台はぬやうと見る前だ
けの働きぶり同じ合せを二度三度して矢伸を堪へ其

うち旦那に嫁御を迎へたらまた元の大まかな氣になら
れやうと夫を頼みに勤むれど千太郎はなか／＼女など
に目を觸れず一人も口が殖えては年に漬つて云々にな
ります 迂闊に女房などは持てませんと番頭を算盤づく
に談じつけ飼猫の白も汚れ目が見えて悪いとて鴉猫を
飼ひ替へらるゝ始末なれば母親も餘りの事とて異見す
れば父上の御遺言を何とお聞きなされた此くらゐ厳し
くしても年の行かぬ者と侮どつて何處かノラを乾く脱
道があるもの貴方も私に異見なさる手間で私の目の
届かぬ隅々の暗い所に氣を付け勝手に行燈の燈心でも
お減しなされと反對の論しに母親も繼でいふべき詞な
くホツと溜息つきて奥の間へ看經に立れけり
儲けるといふ事はあつても儉約といふ事を知らぬば
へ入れる水底抜けて何にもならず年に僅か二百圓儲
人が千百圓遣へば百圓の負債家なり年に僅か二百圓儲
ける者も百八十圓で活計を立てれば二十圓の餘りあり
富むといふ多く獲るにあらずして少く遺ふにあり此
の心掛けなきものは金を貯へる事は皆て置き戸棚の中
に神功皇后を一夜の御宿もかなふまじと父の訓戒を守
り過ぎて千太郎は無暗と拳を握り詰め取つたらがさぬ
締り嚴重寐言にも帳合の合ふ合ぬの外は云はず偶然親

類の者が來ても薄い酒一杯出さず鼻紙を火鉢で焼くや
がら此の氣候では麥作も當りませう近ごろ大樽方の御
説にも麥は米より身軀の爲によいと申せば店の者の養
生の爲めには是から麥飯に仕つらうと存ずると彼面して
の工面話しいつまで待つても膳を出す摸樣なければ最
うドンでもござらうかと各方より誘ひを掛ければイヤ
日が伸びましたれば丁度お宅へお歸りなされて正午ぐ
らゐでござりませうと眞顔の挨拶小面憎いほどの名畜
は是ぞ先代万助殿が鷹揚を苦に病んで折檻された前
過し兎角人といふものは右へ偏るか左りへ傾くかで中
道には行かぬものと近所の人も我を折りたり時も櫻の
四月中旬間内の地主中に散りて根にかへりし者ありて
葬式は午前三時寺は橋場の總泉寺との觸れ出し彼の川
柳點の句に「七時半寺は三谷で親父行き」といふ格に
て店の者を此の葬式に出すは石油をあびてから火掛け
させるより危うしと千太郎は自身で見送りに出で棺桶
の供に立ちて總泉寺へ着きしは午后五時過ぎ讀經畢ッ
て親類の者がイザ御自由にお引取り下されと挨拶に出
たは六時ごろにて地主連中十一人揃つて道をかへての
歸りに山谷の重箱で腹を拵へようと言言したは熱湯好
きの金兵衛葬式の戻りに鰻はチト差合ひであらうとは

俳諧氣違ひの隠居何も死んだ宅兵衛さんが鰻になりはしまひしヌラクラとして一生を過ごされたから其縁でよし鰻にならうとも昨月死んだばかりだから未だ重箱の池へ漬けられるまでの間もなからうといつも演説を聞きに行き瀧澤何某が滔々たる辯解に皆な尤も同意して鯛儀ヘドヤ／＼と押し込むを千太郎は無益しと心には呟きながら町内地主中の極めにて事があつても無ツても月に五十錢づゝ積み置き斯る時には夫にて支拂ひするなれば此處を避けたところが其入費が助かるでもなし結句家へ戻つてから夜食の膳に握るだけが損なれば寧ろ明日の分までも詰め込んで餘りは折にして母の土産と早くも胸に算用して人々の跡に随ひぬ鐵腸は却つて鎔け易く固く握る拳は開くに早し千太郎は勘定づくから考へて葬式の歸りに町内の者と共に山谷の鯛儀へ立ち寄りにて飲みつけ酒に酔ひ早くチロチロとせしを見すまして二ツ星に山形屋の若大將今夜は是非廓へ付き合ひ玉へあいらんは酒の名に残りて出稼ぎ娼妓と品は下ツたがまだ吉原は何處か外より遠つた所があるよ君のやうな男振りで金があつて親がなしどは鬼に鐵棒味淋に鯉餌甘いとも強敵とも滅法とも素敵とももつれた舌では云れない大極上々吉箱は振つても

女には振られる氣遣ひのない御園だサア大將御神輿を上げ玉へ兎も角も行くべし獅子と仕やうではないかと越後屋角兵衛といふ平生は沈黙した男が酔つてはまだやと跡を引き鯉餌立ちになつての帰りに此は妙だ秀郷だ龍宮行きは面白いと堅氣が名代の薪問屋の隠居までが浮れ出しそれは迷惑ひらさら御免と手を招つて詫びる千太郎を無理やりに引張り出して新吉原の何某樓へ連れ込み錦々はたしなみの隠し藝雇人の手前を兼ねて毎日闇魔顔はしてゐれど幾歳になつても忘れぬは此の道地面持の旦那様が相好を崩して豊年じや／＼と菓子賣の眞似をすれば唐物屋の主人は羽織を裏がへしに前から手を通して南京歸りと出掛けいづれも命の縮みへ熨斗をかけたと明日痴氣に病むも忘れて飛び跳るに千太郎はます／＼逆上せて泣顔になるを茶屋の女は氣轉を利かせて相手の臥床へ伴へばいよく青くなつてどうぞ堪忍して歸して呉れとは左りとは近ごろ珍らしいッブな所作大名の懷子とは此のお客鹿木にはなりませんとど耳打ちに相方娼妓は昔しの武士の具足金ともいふべき取つて置きの智慧を出しッブはッブのまゝに手を盡してのめてなし千太郎は天鷲絨の額蒲團へ恐る／＼ににぎり上りて脊中に冷汗悉皆蟻蝨を塗盆に乘

せたる如くなりし。諸一しきり小便所の方がやゝど騒がしきと思ふうち焼場の臭ひも鼻に入るやうになり賑やかな所ほど静かになれば淋しきものにて音頭をどツた角兵衛から先へ目と覺まして見れば昨夜の騒ぎは夢の如く鳴呼くだらぬ事をしたと腕を組めば千太郎をば無理に連れ來りしは餘りに大人氣なしと心づき少しも早く歸らんと急に人々を催し立てれば皆な後悔の顔色揃ひ山形屋はどうしたまだ起きないかドレ起こして來やうと外から聲を掛けて座敷を明けければ千太郎は蒲團の中へ潜り込んで越後屋さん私は少し腹が痛みますから貴君方は先へお歸りなすつて下さいとの挨拶に頭を角兵衛が是れは

第二

吹き散らす暗雲つみに見ぬ旭影
さすかに日の昇めた自分を見
イデー一軍陣羽織の名物製

いづくは有れど一きは春めくは花の吉原なり此地も二百四五十年の前は霞蘆茂れる沼地なりしに遊女町を移されてより忽ち極樂浄土の出店と變りて年々の繁昌北に倚つて地中に磁石を埋めたわけか鐵氣の有る者で吸ひ取られざるはなし。握り人と評判取りし千太郎が俄かに手を擴げての廓通ひ番頭手代も始めのうちは少し

風が變つてよい鹽梅と悦びしがだん／＼遊びにしこり出してグツタ／＼バラ／＼雷遣ひといふものに金錢を撒き散すゆゑ年嵩の番頭は肩をひそめ此の分にては金剛石を俵に作つて土藏に積んで置くとも皆になるは間もなし先日那が爪に火を灯しての御丹誠を聞々ど潰させては我等が申譯なしと千太郎が二日酔に痛んで奥敷に晝寝してゐらるゝ所へ出てだん／＼理を盡して諷むれば千太郎は臉重げに細く見開き成ほど尤もなる意見一々承知したり翌日から遊びを止むべしと云はば其方は悦ぶべきが彼の君さまは何とせらるゝ親の爲身を苦界に沈めて便りとするは吾等ばかり若し一日も顔を見せずには置たなら可愛や焦れて死なれるであらう假にも一人の命金にかへられぬ重い事ぞと眞顔でいふに呆れ返り斯う毒が廻はつては逆も我が先では癒らぬと見切りを付けて番頭佐兵衛病氣と披露して身退けば小松の内府がない後の平家の一門平氣の人類眷族どもどうせ潰す身上なら少しあるうちに身の用心と鳴聲ばかりチウといふ滑稽遠中がさま／＼に工夫して帳面をゴマかす中にも二番頭の八右衛門といふ横着者が金の手支へる時を見込んで此處は私しが働いて見ませうと我がシコタメて置た六百圓を人の名前で主人へ

貸し付け是は外の金と違つて今直とはならぬ處を私し
の顔付くで借り出した金子ゆゑ餘所にどんな急な借財
がござりませうとも夫は捨て置いて是だけは拂ひ下さ
るべしと勝手な念を押すを勘略の千太郎は股売のボン
太郎と區役所へ届けも出さずに改名したところなれば
更に心付ず此急場を間に合せたは大きな手柄是は當座
の褒美なりと煙草入を投げ出して與へらるゝほどなれ
ば内と外とで鑑をかけて身八を忽ち粉にはたきいよい
よ分散間近となると死神の亡靈ともいふべき念入の山
師共が引倒しの味方に付き斯ういふ事を受負つて一度
に三萬圓儲けるの何處の山に金鑽があるから借區願ひ
を出して試み堀に掛らうの彼の川の水を精製すれば石
油になるの風を袋へつめて風車場を立てやうのと寄つ
て掛つて胴に上げサアモウいけなといふ段になると
千太郎一人を抛り出して山師の形はかき消して失せに
けり

上り坂は汗もしとに骨が折るれど下りとなつては鼻
唄で飛んだ時の開いたもの親父萬助が千載の末を期し
て動かぬ礎がたく築き立てし土蔵住居とも可惜他人の
物になして千太郎は身一ツの外はチンカリ銀治問の
裏店に引込んで古着店のハタシとなり喰はねば空腹と

いふことを今始めて知つて嗚呼此の前大勢を連れて二
日泊りの成田詣で僅か三日に百三十圓撒た事があつ
たが彼だけでも志學して殘して置たら差當りドンな小店
でも持つて古着屋を始めやうものを惜しや欲しやと返
らぬ愚痴を翻せしが抑も選ひにはまッて身代を葉抹香
とはたき立てる者に一錢にてもあるうちに目の醒める
者はなし融通のなるだけは八方へ手を廻はして二重に
も三重にも品物を書き入れイザとなるとドカ落ちに落
ちて湯銭にさへ事を欠く身になりはつるものなりまだ
しも千太郎は少しの間賈物を自から取扱ひて木綿物と
絹物だけの區別がつくところから車夫にも落ちずして
毎日柳原の埤や市場をぶら付いて彼方此方へやり返す
うちに十錢か二十錢儲けて漸く其日を送れば白かりし
面も埃に黒みろくくには湯にも入らねば何となく物
臭く愛敬ありし口元は鎗眼と細くなり智慧と油氣は
ぬけて溜るは垢と家賃ばかり金にはなれては人間も淋
しいものと秋ならねども身に染みる風にまた隣りの
燈火壁の破れより折々さすに睡られぬまゝ枕元の煙
草入をさぐりマツチを摺つて一服せんと起直りて匍匐
になりア、思ひ出せば去年の今ごろオ、丁度今夜だ茶
屋で一騒ぎした跡で總勢残らず繰り込んだところ目ざ

す御敵は手疵にて病院入りの事に興を醒して歸らうとするを彼の花衣のあさどめが引どめて偶には冷たい夜具へも寝て御覽なさいといつたのが氣に入つて夫から大きな悶着が起つて立つの立ぬの死ぬの生くるのど成つたので己も大きに痛手を負つたが兎も角も彼女はお女だ憎くないよと慰言。千さんお客様かへ大分面白いか話し聲が聞えますと隣の女房に聲を掛けられ吃驚しナニ一人で假聲を遣つてゐるのさ大分御精が出ますと今に弗箱の置き場に困りませうハハ、と世辭に紛らしてつく／＼思ふに隣の下駄職は斯くの如く毎夜々々十二時過ぎまでも稼ぎて翌朝も我が起る頃に朝飯を仕舞ひて夫婦の共稼ぎ己は夫には引かへ親父が積み上げた身上を崩して此の身になつてもまだ目が醒めきらず夢にも現にも罰當りの妄想これぞ誠に商人冥利に盡きたる境界嗚呼勿体なし／＼いでや命と根を資本にして金一たび昔しの風を吹き返さんと思ひ起せしはまだ福神の控へ綱どこにか果報が残りしと見えたり振り出しは東京の真中の日本橋斜めに富士を眺みて立つとき若し右の足へ力を入れて其の方へ踏み出せば東北の方松前函館へ向ひて進まん若し左の方へ向き

へて進めば大坂長崎西南の端に至るべし踏み出す始めは一步の違ひも末は千里と距離るは人の身の上もまた同じにてサア何せうぞといふ時の覺悟次第向き方一ツで其の善悪は定まるぞかし落ぶれ果て寄る邊なく今は何とか千太郎も誰異見するどなく先非後悔の心さざせし折から隣り長屋の下駄職夫婦の稼ぎに勵まされて大きに發明し此上は身を粉にはたらいても今一たび昔しの上にならん我はまだ二十六なり父上の東京へ出て稼ぎ出し玉ひしは三十越してと聞くものを今氣の付くは遅きに非ずとグタリとしたる氣を取り直して勇氣身軀中へ充ちいつも隣りに叩かれて不精々々に起る者が一番鶏と共に飛び起き井戸端へ出て空を仰ぎ嗚呼生れて是まで朝寝ばかりしたので夜の明際の此の景色を今朝始めて見たが誠によい心持のものだ先づ早起きの徳で二十六年來知らない空の景色を知つた是だけが今朝の儲け物何だか豪氣と勇ましい此の勢ひで出掛けやうと強き集めた一圓ばかりと白金巾の風呂敷一つ肩にして市場を廻りしが我が心持勇ましいければ世間萬物が皆な活々として面白く或る人の許にて裏を刺せし陣羽織の崩しが丸めてあるを何だか物を云ひそうな古袋と目をつけて引き出せば千さん夫は下駄新道の袋物屋が今

朝来るから取ッて置いてくれと云ッたのだからと斷る
 を商人がそんなまだない事を云ッてゐられるものか八
 十錢といふ所を五錢買ひ上げれば文句はあるまいとや
 り込めて錢を渡し露店物の袋物師でも目を付ける處を
 見れば何でも少しは物にならうと以前遊び友達で是も
 同じく今は大きに間口を狭めた大手屋といふ家へ行き
 或る所からは是は名物袋だと親父が大切にしているが急
 に困る事があるゆゑ買つて呉れと頼まれて二圓八十錢
 出したがどうだ堀り出しとは行かぬかと見せれば大手
 屋は裏表を打ち返し成ほど何廣東とか云ひそうな工合
 だ私しの所で潰すより捨り屋へ向けたら坪幾許と來て
 六七圓にはなるだらうオット成るだらうでは困る金が
 急がしい四圓で負けて置く跡は君の儲け次第と手を打
 ヲつて四圓受取り甘いぞ／＼仕合せの風が此方へ向いて
 來た此圖を外さず近所の市へ出て見んと其日のうちに
 また市場へ取ッて返して田舎向きのボロ類を仕入れ大
 風呂敷へ包み込んで肩の痛むを物ともせず爰が辛抱と
 獨り者の心安さは誰に云ひ置く事もなく出先より直に
 松戸の市へ起きぬ
 月六齋とか又は一日とか十日市とか定まりて近在の
 賑ひ上沙に流れ寄ッたかと思ふ足駄の片足もはいて行

ける商ひ物土瓶の蓋ばかり並べても湯茶を啜りて過ぐ
 すは皆る廣い世の中實に營業は草の種と松戸の市へ始
 めて出て千太郎は感心し是なら己のボロ店も驚くこと
 はないと明地を見立て風呂敷を擦げんとするとオイ其
 處は私の番だ何處の組の人だか無暗に店を出ては困る
 ぜと何でも二錢八厘店の男に叱られてキヨロ／＼しま
 た四五軒行きて荒物屋の前へ立止ると其處へ出されて
 は店の邪魔だ何方かへ行ッて下さいと追ひ立てられ是
 れは困ッたと頭を掻きながら立ち去らうとするとき荒
 物屋の主人が奥から出てモシ／＼お待ちなさい若旦那
 ではございませんか千太郎様ではと云はれて吃驚振り
 返れば練を拒んで暇を出した番頭の佐兵衛なればハッ
 と驚き面目なさと昔し懐きさで退きもせず込みもや
 らず重い包を背負ッた儘咽喉佛に苦しみをさせてポン
 ヤリと行むを先づ／＼此方へと呼び入れて佐兵衛は涙
 を流し申して返らぬ事なれど今此の形をなさる事が
 二年前に知れたなら折角のお住居を人手に渡すまい
 もの諸々残念至極まだしも貴方のお目覚めて稼いで
 喰うの心が付たのは御運の盡ぬところナニ市廻りの
 古手物能うござります元が薄いと仰有るが其の御徳發
 が即ち資本お心さへ弛まねば天晴れ身代を仕出し玉ふ

べき御器量とは御幼少の折から御見上げ申ました私し
もお家を出ましてから此家の入夫となり一生懸命に稼
ぎましたお蔭で店の品物も殖し借家であつた此家も昨
年の暮に買ひ取りまして今は少しは人らしく成りまし
た貴君が其心になれば及ばずながら昔しの御恩返し御
力になりませうと頼もしき詞に尙さら千太郎は面目な
くお前が誠ある意見を一言だけでも用ひたならど此身
なつて心づき後悔を噛みました此上は親とも存じて
御詞は背くまい是までの不所存は附物があつての事と
勘辨して下されと涙に咽んでの實心に何がさて御幼少
よりのお馴染悪くはいかで存すべき然し今日は市商ひ
の初陣目出度祝ふて店の前へイザ疾くくお廣げなさ
いお湯漬の支度は手前で致しますすドレお手傳ひ申しま
せう是はどの位なお仕入れへ、エ「ケン」でそれでござ
りますか古着は下りましたなア我子の如く勞りかし
づく忠義は厚き二代の番頭嗚呼人の誠の顯はるゝは斯
る時なり

第三

のるか反るかの運を積む北海通のの
きせん上下胸をいためし涙も辭りて
千歳こさぶく 誰の聲の高砂丸
昔し河村瑞軒と云へる人或る者の金を儲ける工夫を問

ひしに答へて汝は逆も金に縁なし儲けは幾らも近く足
下に落ち散りてあるを拾はずして遠く我等に其工夫を
求め玉ふは既に生涯黄金と宵中合せに暮す相を現はし
たり金儲けの工夫として別になし只よく目を明いて世の
中を見るばかりと示されしとかや此語や誠に商人が平
生記して羽織の紐へ結びつけて置くべきものなり一旦
崩れし山形屋千太郎も今ぞ漸やく睡りの夢覺め一ト稼
ぎして我が運命の程を見んと勇氣を振り起してグット
世間を睨み廻はせば今まで明店同然の裏家に縮まつて
居ては自滅するを待つやうなものの嗚呼我ながら心弱か
りしと思ひ直して飛び出した其朝から闇がよくて番頭
佐兵衛にさへ廻り合ひたれば一層勇氣を増し殊に見る
前にての初商ひなれば働らきを現はさんと腕まくりし
て賣り掛ければ買人も競ひに引かされて婆も囁も此前
に立ちて引き散らせば直段の外に愛敬を負けて暮合ひ
前に残り少なに賣り上げたれば我が店の商ひより氣を
入れて見てゐたる佐兵衛は悦びさすが親御様の面影座
して商ひぶりの上手さ感心いたしました商人は世辭さ
へ云へば宜いと心得て否に喋々しくするものあれど是
れ却つて客に疑ひを起させるもにて實目なる商ひな
らぬことを見破らるゝ種なり商人の第一本尊とする愛

敬といふは客に深切を盡すにありと親旦那も曾て仰せられしが貴方が商ひの意氣込みはその御意にあたりて多年練磨いたす私共も及ばぬ所あり此氣を挫き玉はずに御骨折りあらば再び山形屋の暖簾を掲げんことゑひなし嗚呼昨日までは懷育ちのお坊様今日は老練の市商人艱難は人を玉にすると承はりしは誠に此のことには付て親旦那が貴方が御幼少の頃に伊勢屋仁助殿にお預けなされしは御無理でないことが知れましたと後ろから煽ぎ立て悦び其夜は我が家へ泊めて夜と共の話しに此上何をなさるの思召ぞと問はれ千太郎はしばらく考へ兼ね思ひよりしは此の古着の下りを幸ひ多く仕入れて北海道へ持ち渡り同地の様子を見て殊に寄らば北海道にて一旗揚げんと思ふなりと云へば佐兵衛は手を拍ツて其思し立ち至極妙なり兎角東京の人は心弱くして儲かる事が目の先きにチラ付いて居ても土地を離るゝ事を否がりて足は東京の外の土を踏まざりかき水瓶の中の錦魚が互ひに泡を呑みあつて漸く生てゐるやうな狭い丁見其處を飛び離れて北海道へどのお志ざし天晴れの御奮發及ばずながら御助力致すべしと資本五十圓を貸し與へぬ日和のよき時は誰も船頭船は青疊を敷きつめて遙かに

霞む島山浦々見はてぬ沖は天の盡くる所か雲は水に近づき下りて界をなす遠く白きものゝ目に入るは鳥かと思へばや、近づきて風帆船と現はるゝなど取り集め云もつきじ左るからに詠むる心も勇ましく思はず愉快と聲や揚げん若し荒荒く浪高く加ふるに雨さへ降りて今まで見えつるものは黒幕に掩はれたるが如し潮の吼る聲耳を貫くに至りては又船路ほどの恐ろしきものはなし船といへば藝妓帶間を入れて綾瀬中洲に遊びたる家根船より外には乗らず江の島にて海の廣さに驚いた千太郎も必死となりては豚同様に押込まれる蒸氣船の下等室も驚くに足らずと佐兵衛が助力に四五十圓の古着を仕入れ函館行きの氣船に乗り組みしは朝顔の花もや、小さく咲く九月上旬の事なりしが下等室の中は蒸し熱くして堪へがたければ甲板に出て四方を詠むるうち空散かに變りボツリ／＼雨が降るに皆な人々は室の中へ遁が込みたれど千太郎は船に酔ひて酩酊るければ元より旅着の單物濡れるは更に厭はじと尚ほ甲板にあれば同じ類の人にや片隅に三人かたまりてそば降る雨を毛布にて防ぎ居るゆゑ立ち寄りて困りました天氣と挨拶してよく見れば一人は官員とも見え商人とも思はれる四十五六の男に妻と娘ならん人柄よき三十六七の

と十七八の婦人なればさぞ困りなさうませう御女中
 は船にお酔ひなすつたのでござりますか私も汽船は
 始めてゆゑ大きに弱りましたへい少しぐらゐ濡れても
 此處にある方が宜しうござります是を少しあげてごら
 んなさいまし紫金錠と一つらに申す中에서도少し利がよ
 いやうでナニ其まゝ削つて宜しうござりますと頼りに
 話しをすれば此人は或る會社の役員にて函館の出張
 所へ在勤中ながら今度東京へ家族を引まどめに行きし
 歸りとの事に千太郎もよき便りを得たりと身の上のこ
 と出商ひの目的等を搔摘んで話せば夫はよい思ひつき
 骨さへ折れば新しい國ゆゑ随分儲けはあります彼方
 へ着いたらお尋ね下さい甲斐々々しくお世話も出来ま
 すまいがお話し相手になりませうと誠ある詞に大きに
 力を得尙ほ四方八方の話のうち雨はかりと上りて
 拭ふたやうな晴天に氣づかひし心も静まりて此の娘の
 顔をチラリと見れば顔青ざめて頬のどころだけが桃色
 目はうるみてあれど目元りよく可愛あり女に飽きし
 千太郎も見ると珍らしき故にや思はず心を動かしか
 汽船の名は高砂丸相生の松岡何某に見知られたるに便
 りを得て千太郎はボロ古着の露店を出しては見たれど

長く掛つてボツ／＼賣るやうでは入費倒れとなれば正
 れ付大安にはたぐに如かずと物の高い中へ思ひ切つて
 安く付け出したので晝夜四口ばかりでパタ／＼と賣れ
 仕舞ひ少しの残りは同地の古着屋へ賣り込み期定を仕
 上げて見ると十圓餘儲けはあれど行歸りの入費を引い
 ては一文も残らぬホンの無益骨なるに驚きしが何ぞ歸
 りに東京へ向く土地の物の買ひ込み夫にて一ト儲けせ
 んと松岡を尋ねて其事を相談するど帆立貝はどうだ
 の助言に成ほど細資本なれば安く上げて金だけ皆な帆立
 からんと松岡の引廻しにて賣り上げた金だけ皆な帆立
 貝を仕入れ備出帆の船あれば暇乞ひに寄ると澤町に
 ある老母の許へ是を届けて呉れまいか尤も歸りの船賃
 だけは我等が辨ずべしとは幸ひの事と承諾し大きな柳
 行李一ツと我紙四五通外に口上もたしかに聞て今度二
 の返しに來るときには云々の物を調へてと小間物類の
 注文を受け船賃にとて除けて置いた金も只據つて歸る
 は智慧がないといろ／＼見立て買ひ入れ荷造りも急が
 しく乗船して東京へ着くと直に松戸の佐兵衛方へ知ら
 せれば同人も心配してゐたところなれば早速來て無
 事なりしを悦び始めての商ひにたど一錢にても利益
 ありしは目出度し帆立貝とはよい思ひつき是だけは我

等方にて捌くべしと諸方驅け廻りて相場を聞き合はせしに折しも品少なの折なりとて願て一倍の直段なれば

千太郎はいよく勇みが付き夫を賣りて今度は勝手も

分りたれば乗り込んで商法せんと佐兵衛に頼みて諸人

に立ちて貰ひ富田屋といふ大店より古著類三百圓ほど

仕入れて再び函館へ赴きしは寒さに向ふ頃なれば一層

暑氣よく思ひのまゝに儲けてさへ外の店と競べては大

層安いと評判され松岡もまた見所ある若者なりと信用

して萬事に力を添へたれば諸事都合よくして吹き寄せ

る幸福風が向き直つては智慧分別も出る者にて爲るほ

どの事皆なあたり其年は三度の往返にて一文なしより

五百圓ほどの身上に潜ぎつけたれば松岡は其器量を見

込み娘を嫁に貰ひくれよとの詞何が思案考へまでもな

く有難しと承知して同地内洞町に松岡が抵當流れで引

受し立派な表店あれば夫を借て大きく賣り出し佐兵衛

は東京より品を見計らひては積み送り雙方相應じての

稼ぎにムクムクと頭を上げ今では同地で屈指の持丸長

者手は空しくせぬ寶の山形屋昔しにまさる繁昌も稼ぐ

といふ方へ舵を向けたる船の進み人の浮き沈みはたい

此舵の取りかたにありと知り玉へかし

三の巻

第一

人問も上り下り定らぬ雲行の相場事
親ばなき寄りに有難ひらぬ押掛客は
蔵に馬鹿すき腹へドンな挨拶

正宗の刀とて菜切庖丁とて鐵に二色のかはりはなし只
鍛へがらに由るとかや儲け出す者として身代限りする者
とて人に始めより定めあるにあらざ只稼ぎ方の善きと
悪しきとのみなり人は何でも運次第善な持つて生れた
耳朶だ杯と成るも敗るも天に任せて己はころり脇枕鼻
唄して牡丹餅の棚から落ちるをまちがつた丁簡では一
生人らしうはならぬもの運も果報も皆な人の作るとこ
ろ外に何の構ひ人がありませうぞ自分の志覺悪しくし
て爲る事がいすかとなるどはしたなく人を咎め世が悪
いとの物議り其身の因果經でも覗いたやうに前世の約
束事と自分で自分をたしなめて無理な諦めを付けるか
と思へばゴッそり削つて坊主にもならねばたしなんで
見ても情けなや又未練でウヂウヂと愚痴を友達にして
一生を過ぐすとは笑止氣の毒世の毒なり一人稼ぐは即
ち其國が稼ぐなり一人怠るは同じく一國が怠たるなり
り國の富と立派に云へば大層かけ離れたやうなれど親

しく個々人々が働くも働らぬの上には現はるゝの事なれば一人一人の任は重し互ひに油断は奈良坂や見手拍の二面其の一面の伊勢屋爲吉、兩親なき後は御山の大家軍配を振り廻しての獨り廣言、下手に取扱へば膝の上の利を争ふに商賈が少さい高では是が満足に取上りツて毎年身上が延びたにしろ、大體算盤で當りの付いた儲けこんな事で腹鼓を打ち能事畢ると濟して居ては更に可笑からずいでも人世の戰場へ馬を乗り出し手並のほどを顯はして眠りにほれたる者共を驚かさん左れど今直ぐと云つては濱商ひも資本薄し先づは相場で運を試しドカ儲けをするか大損ではたか仰るか反るか雌雄を一擧に決せんと、馬出の若鷹氣ばかり荒くグット一掴みにしてくれんと新父仁助が數年の丹誠で渾やく夫婦に小僧小女ぐらゐは過ぎ行かれるまで客を付けた質店に株付の賣店に出し何れも此處が先祖傳來の居城ではなし賣つても更に惜しからず利のある所が即ち我が居所なりと頭へ血を上げて自から好む宿なしとなり家や質やら家財雜具サラリと賣上げて四百五十圓餘握つて直ぐに蟬殼町へ飛び出し思ひ切つて皆な買ひに入れると間拍子よく相場が上りて意外の勝利は

諸こそ天下の富は皆な我手に入る瑞相を現したり此圖を外すなど鏡ひ掛つて忽ちのうちに三千圓ほど勝ち得たるは目覺しくこそ見えにけれ
運は偶然に來ず偶然に去る者は好運に非ずとは歐州賢哲の言なり博奕同様の勝負事にて贏ち得たる金は夢に拾ひし如くに倅しやと思ふうちにはかなく覺めて徒らに悶へかこつ種ならん伊勢屋爲吉は一攫千金濡手で粟地道に土臺から据ゑて掛つてはまたるしと飛び出して相場に手を出すや二月と經ぬうちに三千餘圓儲けたので我ながら感心し人の考へといふものは種々に親子と云つても同じには行かぬもの己の親父も家業には抜目なく随分みよつちい人であつたが白痴が雪連磨の差圖をするのではないがチト目の付け處が卑くかつた何でも丈夫一式にチビリ／＼やる丁簡は草鞋穿て五十三次を丁寧な歩いた昔し者の氣質、鐵道や汽船を利用して世界を一跨ぎにする今のものゝ氣とは圓い芋筈に角な蓋で合はぬ筈だ親父が置いた算盤では孫の代までもならねば得られぬ三千圓を四五十日のうちに握るとは天性已に備はる器量今四五年經つうちにはカリホルニヤの金鑛もメキシコの銀鑛も此方のものにして見せると

風をうけたる奴服我が工夫にて中空へ登りたりとの高慢氣落ちぬを知らぬぞうたてける。濱町邊の或る家を中宿にして毎日場所へ出掛け己の顔次第で相場がまどつくやうにせんものと競ひに乗って掛るうち一寸隙づき出すとサア夫からバタ／＼と蛤を逆に釣し儲けた金は倍置き家を賣つた元も子も耗つくした上少し融通のなるにつけて諸方へ借りも大きく出来逆も只では此地に居られず最期と決して今一戦是で敗北すればどうも東京には居ぬ覺悟其場から直ぐに二三百里先へ驅落のつもりなれば草提の中へ着替への衣類と入用のもの少しを詰め込みて馴染の髪結床へ預け置き醜算段で差金を拵へしがさて斯うなッては氣が迷ひて空を見ても地を見ても賣りに廻ッてよいやら買と出てよいやら更に心決せず常にはそんな愚痴でもない男なるが乗つた油が抜け掛ッては分別も思案も何處へか宿をやるものど見え覺束なくも或る賣卜者の處へ行きて十錢はづみ運氣を見て貰ふと卜者は天眼鏡をさし付けてつく／＼見て是は御運の開くところ進んでなさに利ありと卦面にも顯はれました左れど少しさはりがないでもない所あれば是は俗にいふ物は祝ひからで十錢のところを二十錢にはづむといふやうな御祈禱があれば必らず

御運は懷をあけて風を受けるやうなものでござるが海へも川へも着かぬ卜ひも眼の眩んだ爲吉は何か一人合點してよく見て下された是は別にお禮なりと又十錢置いて立ち去りしは賣卜者の方だけがまづ當たつた象なり昔し或る人商賣の上に付て我が一存に決し兼ねる事ありて其ころ卜占に名を得たる人につきて此は買ひ受けて宜しきや如何に判斷して給はれと云ふに卜者筮を執りて仔細らしく咳拂ひし買ひ玉ふべし進みて買ひ玉ふに利ありと述べしにぞ其人大いに悦びて頼て家に歸り身代を傾けて其品を買ひたるに思ひの外直段下りてしたゝかに損をしたり悪き時には人を怨む凡俗のならひとて其の商人は水をかけなばチウと云つて湯氣も立つべきほどに怒り狂ひて卜者の許へ押掛け此の貧乏神の堂守め何の怨がかりて我に斯くまゝ損をさせしぞ己れが勧めるまゝに買ひ入れて身代を傾けたり此損辨へて返せかしと腕まくりして机の前に立てば卜者は令笑ひ烏澁の人かな少し心を静めてよく思ひ玉へ誠我が占がよく中りて萬に一つも違ふことなくば我れまづ其商業にたづさはりて巨大の利を得べし争で斯く貧しくしてあらんやとやり返されて猛かりし商人も實に我は愚か

なりきと自ら悔て遁げ歸りしと云ふ伊勢屋爲吉も左る鈍
き男にてはなかりしが續く失敗に氣落ちして智慧の鏡
が曇り賣下者に見て貰ふと運の開く瑞相と聞くに聊か
勇みをなし有るたけ手一杯買ひと出掛けたる其日から
してデリ／＼下りはい／＼運の窮めと氣て用意し
た遁げ支度が役に立ち出掛けては見たが手を拂つて金
を出したれば大坂まで行くだけの路錢なく思案仕かへ
て下總行徳在に母方の遠縁あれば是を便り少しの間身
を隠し餘熱が醒めてから東京へ再び出んと考へをつけ
新橋の方へ向ひて足を引かへして本所の方をさし歩み
ながらつら／＼思へば母方の縁者とは云平生うと／＼
しく先より尋ねて來ても餘りよくも待遇せざりしに今
俄かに身の振り方つかねばと面押し拭ふても行かれず
ハテどうがなと屈托に道を間違へて市川の方へ出たれ
ばよし／＼中山の祖師へ參詣の次に寄つたといはふ然
し家の宗旨は淨土宗だから日蓮へ參詣とはチト妙だが
其處等は辯舌でごまかせと砂路をボツ／＼歩いて弱
を少しばかり土産に買ひ章臥足を引ずつて午後二時半
ども思しきころ十年も前に只一度母に連れられて行ッ
たばかりの親類を尋ねいづも變りもなく目出度く
存ずるしばかりの御不沙汰餘りお懷かしさに今日中山

諸での次ながら伺ひましたといへばヤレ珍らしやよく
お出と云ふかと思ひの外主は苦い顔して是は／＼一昨
年東京の御祭禮を見物ながらお尋ね申したとき在所の
者は草鞋掛けで迷惑とて詞さへろくに掛け下さらぬ
貴方が何と思召してかわざ／＼のお出有難く存じます
と痛めつけたる挨拶いと空腹にこたへける

第二

親の泣寄りと手前勝手手の俗諺に洩れずよい時には親類
が尋ねても五月蠅やまた無心にや來つらんと云ひ出す
詞の先を折つて此ごろの不景氣に大きに弱りましたと
まづ垣根を固く据ゑ歸つた跡もよくは云はば田舎者の
世間知らづめが小豆の一二升ばかりで三人四人悠々と
滞留して外見も構はず喰立られたには驚いたまだよい
顔を見せたなら此上五七日も腰を落付るで有らう思ひ
よらぬ事で今月もまづ二三圓の痛事で有つたと左りと
は情合に外れたさもしい了簡それほどの不愛相をして
置きながら其身が困る時は親類といふ字を眞向に振り
かぶつて矢鱈と切り込む鐵面皮爲吉は親類の者の挨拶
キツクリ胸にこたへしが左あらぬ體に汗押拭ひ商賣に

ウント仰向にそりの合はぬ田舎氣質
痛み入つたるシビリは京大坂の尋人
運ふも面目なきけ有る内儀の氣轉

忙しく追れて心の外の失禮イヤモウ東京の町住ひは火
事場か戦場に居ると同じで雑踏を極めますより折角の
あいの砌りもお構ひ申さず兎角東京人は情が薄く在所
の方の情の厚い御目からは驚ろきなさるほどござり
ませうへへと空笑ひ自分に當つけた事を東京
人一般へ押し塗ッて自分の荷を軽くする分別されど親
類の者はなか／＼氣を弛さず煙草の火と暖い茶一杯出
したざりで母親が死去の悔み何や彼や取あつめての話
しに爲吉は時刻さへ移れば必らず泊ッて行けといふな
らん一晚泊まれば其上は居付く工夫はさま／＼ありと
傾ぶく日脚を横目で見ながらだ／＼と話し込むにさ
すが在所者の義理がたく餽飢打ちて酒一陶添へて出せ
ば待ち付けたるもてなしサ／＼と喰べ畢り東京で頂
くとはまた格別と其所等見廻して片端より寝て掛れど
まだ泊れとは云はず行徳から船が出ますゆゑお歸りも
造作はないが宿へ廻らずと此處から直に船場へ出る近
道がござる次郎よ口の暮れぬうち御案内申して上げよ
お客様には細道ゆゑ知れにくからうぞと退立の詞に次
郎は早や尻端折ッて上り口へ出でイヤト促がさねばか
りの氣色爲吉も此處一本槍にさして來たに泊り損ねて
は今夜から宿無しなり何とかして泊まる思案と急に考

へて手に持ちし猪口を投げ出してウント後へ反りかへ
れば主人夫婦は驚ろき表に居たる次郎も飛び込んで客
人何となされたソレ水よ氣付よ宿の醫師をど騒ぐうち
日は暮はてたれば最ふよい頃と爲吉は漸やく正氣づき
たるやうな顔色ヤレヤレ皆様に御心配をかけました痛
癢の加減かアイタタと顔を皺めるに夫でも歸れどは云
ず今夜は泊ッて緩然と御養生それ承はッて差込も落付
きました
一夜の宿といへば何處へ行ても寝られやうと懐中の暖
かいうちに思ふとは大きな違ひサア行處が無いとはい
ふ際になると挽捨た車の中に入ッても夜露を凌ぐ工夫
をせねばならず短夜なればとて左ながら夜通しにも歩
かれぬものなり夫を思へば我家住ひの有難さはにつけ
ても人の家借りて其の家賃を滞こほらすといふは俄雨
にさしかゝつた借金を取上げて返さぬより罪は重しと
或る差配さんが下肥取る百姓と暮の餅の相談しなが
ら語りしを壁越しに聞いた事ありしが實にもと今ぞ思
ひ合はせたる爲吉は太き息を吐いて眠られぬまゝの考
へごと苦しまぎれの窮策に氣絶して見せたので潮やく
御神輿は据たものゝ彼の様子では逆も此處に永く留ま
るといふ譯にも行かぬ何としたもので有うといろ／＼

の事を思ひ續ける考への仕舞の方は夢となり夢の終りはまた妄思うつら／＼と夜を明せしがまづ兎も角も今は二三三日滯留せんと思へばわざと食事を抑てまだ氣分勝れぬ由にて立うといはねば百姓は詮方なく留守を頼んで野等へ出でし跡につく／＼手を組めばよしや此處に止まつたところが何をして一ツ旗上げんといふ目的もなし百姓の手傳ひにて厭ひはせぬと夫ほどの役に立ねばよい顔はせまじ是は寧ろ仔細を打あけ幾許か路用を借りて大坂へ行くより外に詮方なしと思案を決して其日家中が野等より歸るを待ち實は身代仕もつれて斯の仕合と誠を明かせば田舎氣質に氣の毒がかり迎も御力になる譯に參らねど大坂に左る御目的が御ざるなら路用と申すほどならねど聊か御見繼申すべしと金三圓差出すに爲吉は面目なさど氣の毒さ今さら冷汗の溢し直しをして孰れ人がましう成りました節は乾度御禮を申すべしと手をつけばイヤ御禮に及ばず只再び御出なきが何より忝けなく存ずると作り飾りのなひ打まけ挨拶にいよく痛み入り長居は御邪魔と御金を押し戴きて懷中し直に立ちて夜の間に東京を過ぎ汽車は有れども横目に睨め草臥足引ずりて東海道五十三次首尾よく歩みて大坂へ着き錢入を見れば八十錢ほど残り有れば少

しの土産物を買ひ調のへ先には鉢裁を作つて大きに仕損ふたゆゑ今度は頭から泣付く合點大坂西區新町通り崎茂といふ男は親類ではなければ相場に掛り始めた頃其男が東京に居て心易き中となり歸坂の節も停車場まで送り互ひに力に成り合はんと手札を取かはした中なれば商法上の失敗は左のみ笑ひもすまじと尋ね行

何處其處で何とお聞なされば直知れますと自分ばかり承知しても他人はねから知らぬ顔半兵衛さんとは聞たやうな名だが商賣が分らなくては知れにくいと隣家でさへ知らぬが多し爲吉は彼方此方と聞合せ漸やく尋ね當て案内を乞へば折よく澁茂が居合せて是れは珍らしや其の形で此方へ參られたは相場に尾を出して東京を飛去られたものと見えるが氣を落されな又吹き返す風も有らうサア遠慮なく座敷へと奥底なき詞に親を得たほど悦び埃を振ふて座敷へ通れば女房もしどやかに前様の事は衆で宿より承りました私方は御覽の通り汚い家でござりますすが不自由をお忍びなされて何時までも御遠慮なくお出なされまし決して他人の處と思召さず我家に居ると同じに御緩りとなされどうせ厄介にするから悪い顔を見せるも損とよく合點しての挨拶

移上方の人は聲がらさへが柔和やかなり、またの名を
 内實とも崇める如く他人の家の閨を跨ぎて先づ第一に
 客の顔へ反射するものは其家の妻女の挨拶取なしなり
 冷たい疊にも暖かに熱い座敷も涼やかに居心よきは詞
 の品と自然に溢るゝ愛敬にて自づと夫の價格さへ上る
 ものなれば心づくべし殊更居候の身には表門より裏口
 から取り入らねば居辛いものなれば爲吉は内義の愛相
 よきにいよゝ安堵して爰に礎を下したるが諸何を仕
 やうといふ當もなく只居食ひでは氣の毒なりト云ッて
 拭掃除の働らきも狭き家なれば用といふほどにはなら
 ず是では寧ろ奉公を口を尋ねても東京者で中年と來
 ては何か仔細が有る奴と危ぶみて固い家では否がりて
 目見えもさせねば腕を見せて取返まうといふ場合もな
 く空しく半月ばかりを送くりしが如何にしても濫茂夫
 婦が深切にして呉れるだけが氣の毒一倍にていよゝ
 此上は車を挽いてなりと口過ぎをなさんと其事を相談
 すれば濫茂も頭を撫で折角東京から便ッてござつた此
 方に車を挽かせるとは私も餘まり智恵がないが近ごろ
 の不景氣で問屋向きさへ十人の所は七人五人は三人と
 人減らしの中なれば思はしい所もなく斯してござるを
 私の方では厭はねど諸事に氣の廻る貴公なれば定めて

心病しく思はれやう残念ながら考へ通り車を挽いて御
 覽なされ然しいかに知らぬ土地とは云へ後に出世の妨
 げとなるも知れねば晝は見合はして夜だけ出て見られ
 よ夫もあせるには及ばぬ貴公の小遣取りにしなされど
 直に知人から一人乗の奇麗な車を借りて呉れたれば早
 連鑑札をうけて夜に入りて挽き出すとは諸も種々の廻
 り合せや

第三

油のきれた人力車ひき出した縁の糸
 くり廻しのよい器量見初たる戀聲
 舞臺で花をまき散らす愛敬
 いけぬ時は車を挽く分の事サと高を括ッて世を鼻唄で
 送る丁簡の者あれど是れ大きな間違なり他人のする
 事を傍から見れば何事も造作なきやうなれどイザ其身
 になつて見ると思つたとは格別のもの成ほど人力車を
 挽くに別段學校の課程を踏むといふこともなく試験を
 經て免狀を受けるといふ面倒もなく誰にでも直になれ
 る代り同業者多ければ仕事少なく草鞋履き向ふ鉢巻で
 出たところが乗人がなくては売車の番人に質なしで雇
 はれたも同様乗るか乗らぬかと通る人柄を眺めて一々
 判断をつけるも随分と草臥たる事なるべし殊更地理方
 角も知ぬ他國のたゞまひ心細さも喰ねば空腹といふ

督責人あれば遊んでは居られず爲吉は借りて貰つた車の梶棒しツかと握ッて夜に入ッて四辻へ客待ちに出かけたが無暗どこすり付いて勸めるも失禮と遠く離れて歸りをお安くと聲をかけても一向乗人なく七時半から十時頃までキヨロ／＼として立續けに足は重くなる腹は輕くなるボンヤリとしてしまひしが何でも錢の顔を見ずば夜が明るとも歸るまじと決心し今までは早の時でも天氣を願ひし者が天を仰ぎてペラ／＼雨でも降つたならと祈るも其の業々についての身勝手なりオイ車夫さん急いで南地までやつて下されと店者らしい男が酒機嫌で直もきめずに乗て呉れたは嬉やと二つ返詞で曳き出して見たが売と違ッて人を乗てはなかく挽き悪く梶を上れば後ろへ倒れそうなり梶を下げれば客が前へ轉げ落ちそうなり小石に當ッてもガタリとして足が止れば客は大きな氣をあせりオイ如何した最少と氣ばツて挽かんかヤア大變違ッた道へ入いッた跡へ引きかへして曲り角から西のかたへ、途方もない其方へ行ッては元の道へ歸るがなど叱られていよく狼狽する時に乗つたる客は詞を和らげお前は始めて挽きに出なすツた者で有らう而して東京詞だが彼方も思はしくなくて此方へお出かど尋ねられて息せはしくへい東京

で米相場で失策まして此方へ参りましたが爲る事が無いのでへい如何もお氣の毒さまで其かわり代は宜しうござります替古の爲ですからお曳かせなすツてといふに客人は困ツた顔つき替古の氣でゆるやられては驚ろくが相場で落ちられたと聞いては私も相場師の端くれじや何だか氣の毒に思はれる、なぜ此方へ來たら會所廻りに來られぬのだと話しかけるに便りを得て鹽氣の有る汗を手にて拭ひぬ
東京の人とは面白い私と一途に來なされと乗客につれられて南新地の席貸へ揚りしが爲吉は是まで儲け一方に身を入れたれば相場師の中にもまれても遊びをせねば座敷つきも悪けれど客は何とも思はぬ様子一人機嫌にていろ／＼話しかけナント東京の御方少しの引廻しは私がしませうが最一度此方の堂島へ身を入れて見る氣は無いかお前さんの調子なら屹度よい事がありませうと云ツて呉れるに爲吉は有難しと禮を述べ諸貴方が相場にお係り合があると聞いて斯ふ申すは如何なれど商人も最う相場に流れるやうでは往生でございます私も初めは是でト掴みにと競ひ掛ッて見ましたがつらく／＼考へるに是では逆も根の固い商人には成れぬと諦めサラリと濡手の粟を止め乾た汗をまた出して地

道に稼ぎ上げる積りでございますと云ふを打消して客
人は打笑ひ夫は貴公が敗北して氣落ちからの引込み思
案世には相場事をどんな愚事するやうに云罵しる人が
有るが是は商法の活機を知らぬ諸儲けといふは損の
向ふ勝といふは敗といふがあればなり商法は皆な勝負
事こればかりが道に外れたやうに理屈ばるは負た者の
苦口を受賣するか儲けた身をヤツかんでの誇り取り上
げるは腹が小さい地道だの傍道だのと區別を立ずに氣
を張つてやつて見るサと酔の餘りの高言を爲吉は打ち
返さんと思ひしが夫も詰らぬ齒ざしりなり彼の人も己
の身になつたら目が覺めるであらう此様な人の座を取
持も無益しと頻に辭して歸らんとするを尙ほ引止め今
ま居る所などを委しく聞き濫茂は私も知る人だ前
の風を見て不圖思ひ付いた事があるが明日にも濫茂へ行
つて話しをしませう車を挽いても時は明くまい二三
止めてござるが宜い星は今夜の骨折と半圓札一枚呉れ
たのに力づいて十二時ごろ茶屋を出で何だかサツパ
方角が分らない車を挽きながら道も聞かれまいと獨り
咄やきながら歸る道の傍らに蹲んで居たる婆さんがモ
シ／＼宗右衛門町までやつて下ださいあ氣の毒ですが
最う歸りで勞れて居ますから御免蒙ぶります急に持病

がさし込で困りますどうか近所ゆゑ乗て行てといふに
提燈をさし付けて見れば寔々しき婆さんが苦しむ躰に
オ、お困りなさりませうサアお乗なさいまだ素人です
から工合が悪うござります宗右衛門町といふのは此
の河岸の二つ目の通りですか宜しい密と挽きますナニ
賃錢其様な心配には及びません道の間違はないやうに
車の上から教へて下さい夜が更けると人通りがなくて
そんな挽能い是从から此方へ曲りますかエ。ガラ／＼
乗らる老婆に道を聞き／＼宗右衛門町へ來ると町の
入口にて提燈を持ちし十七八の娘がオヤ祖母さんどう
なすつたか歸りが遅いからお案じ申して家は裏のお菊
さんに頼んで爰までお迎ひに参りました車夫さん御苦
勞さまと娘が先に立ち其の家の前へ來れば婆さんは下
腹を押しながら前聞ておくれ川北さんでお夜食を戴
いたのでツイ遅くなり橋を渡る時分から差込んで苦し
くてならぬゆゑ車へ乗つて歸らうとししばらく軒下に蹲
んで居たところへ彼の車夫さんが通りあわせ草臥て居
るから否だといふのを無理に頼んで來たのだよと老婦
の癖とて息ぜはしがりながら長く話すに娘は驚ろき左
様でござりますか車夫さん誠に有難うございました代

は如何ほど上げますと表を明けても車夫は居ず待たせて置いたので歸つてしまつたのかアレ彼方へ行のが夫だらう車夫さん／＼と呼びながら追ひ來るに爲吉は戻り返りまだ何か御用ですか。イエ車代をあげるのを忘れましましたから。ナニ其の御心配には及ません老人にするのは死んだ母親へ爲るのも同じこと元より錢を取る氣で乗たのでは有りません。デハ御氣の毒さまで。どう致しまして賃を取やうな挽方ではござりませんのさアハ、と笑ひながら轎車を挽いて歸るを娘は見送り老人を勞はつて只乗せて來て下さる氣立車夫さんには珍らしい物云ひもキツパリしてそして立派な男振東京の御方はホンニ頼もしいこと、打眺めしが心づいて我家へ走り戻りぬ爲吉は初めて出た夜に五十錢取たれば景氣よく姉御々々と戸を叩けばまだ澁茂も起て居てどうなされた挽けましたかと心配して呉れる深切に云々と話せばそれは御手柄かし其男は誰だらう彼か此人かと夫婦評判しながら寐につきしが翌日の晝前泉源といふ男が來て昨夜此方に掛人になつて居る人の車に乗つたが随分驚いたよといふに皆はお客はお前さんかさぞ乗心が宜かつたらうと打笑へばイヤ夫について相談が有つて來たのだ先日お前が奉公に出したいと話しの

あつたは彼人だらうが前が確と保證するなら鐔の口があるがオット人の家を立るなんどは否といふだらう其處が好もしい所だ好んで聲養子になる者に確な人間が有る譯はない高が斯だ前と二人で世話をして彼人にどんな商ひでもさせ御身ではといふので婆さん付の嫁の世話をしやうと云のサお前も勸めて下さいナニサ私の伯母が宗右衛門町に孫娘と二人で居る所へ入つて貰ひたいのサ彼人が相場を見切つて固い商賣と思ひ立た所が見込みだと頼りに褒めるに澁茂も悦び爲吉を改めて引合せ先さへよくばといふ所まで漕ぎ付けぬ縁といふものは何處に在るか黒暗でマツチを探るより知れぬものと夜中の地震に驚いた人の聲に云つたは誤りにて深切と愛敬の有る所が縁の繫ぎ目遠いも近いも變りはない面白く人を挽き當た車の輪廻りて妻となる人は宗右衛門町のおそよといふ娘にて父母に後れて祖母を力祖母もまた此の孫娘を杖にして立つ甲斐もなき瘦せ身代甥の泉源の見繼ぎにて漸やく其日おくれ毛を掻き上げて結ぶ櫛油少しばかりの小間物を並べて店を針手の利く人仕事にて貧乏に體をあてがひ鑑識を世間にかくせしが或日泉源が來て衆て尋ねるよい鐔を見當つたぞ夫は云々いふ人との相談に元より否やは此方に

なしと直に見合をして見ると互に驚くばかりにておそ
 よは勿論祖母も此人の深切の噂を云暮したところなれ
 ば其の悦びはいふばかりなく芽出度婚儀納りて後ち何
 をして見る氣か貴公の見込みに仕玉へ資本は我等が貸し
 所を轉じるとも望みのまゝに述べ商ひは賣り込が肝
 申さんと泉源の詞に爲吉は禱を述べ商ひは賣り込が肝
 賢張ったのは蜘蛛の巢ばかりでも店を明け續いて居れ
 ば人が何屋とよく知るは是れぞ第一の資本なり殊に睡
 り目であつた店は少し品を入れて景氣を付けければクワ
 ツと目覺しく見えるもの御當地は何事も東京を賞美さ
 れるを幸ひ私し東京詞の辨を振ひ諸客の愛敬を取らん
 こと覺えの中に在り最も此家に付け渡りの小間物は適
 當な賣物品は此上十四五圓も入れれば一寸見よく飾れ
 ませうが店の暖簾を東京風に染め出すと新聞紙の廣告
 する代料だけが凡そ二十圓も掛りませう夫に一つの工
 夫といふは當地の俳優の手を假りて舞臺で廣めを仕て
 貰ふ事にて夫だけを貴君が御世話下されば祖母が内實
 銀貨にて貯へ置きしもの四十圓餘ありとて渡されたれ
 ば内の機關の糸は切れぬやうに引きまます芝居で撒かせ
 る簀か供掛は一日に二十本か三十本外の散を見ても
 日に一圓當ぐらゐで納めます只それをやらせる顔役が

貴君の御助力で此家へ来て二日目の軍配には手の届い
 た考へ草廬を出ずして天下三分の計を定めし臥龍先生
 の生れがはりかどうやら先夜の車は四輪車と見えたと
 泉源も濫茂も大きに褒め其の趣向外れはあらじと直に
 それく手都合してマンマとの賣出し花やかにして勇
 ましきに福の神の面くらつて此家へ舞込みしか日に月
 にの繁昌何でも此家の品でなければ東京でないとの評
 判立て續く土藏の數も限りなき富貴の春と祝ひけると
 かや

四の巻

第一

荒夷のおそろしげなるが傍にありて御子はおはすやと
 問ひしに一人も持ち侍らずと答へしかばさては物のあ
 はれは知り給はじ情なき御心にぞものし玉ふらんどい
 とおそろし子故にこそ萬の憐れは思ひ知らるれど云ひ
 しを兼好法師も愛てさも有ぬべき事なりとて徒然舛に
 記せしを林道春先生も同心してされば子として父母
 の心をうけて心とせばおのづから孝もあるべけれど註

せられぬ誠に親の子を思ふ心ほどやるせなき物はなし
 懷妊せし時より産み出るまでの心遣ひ産聲揚ぐるを聞
 て嬉しや片輪にても非ざりけりと始めて重荷を卸せし
 心地する時は即ち卸せし重荷に重た増しを付けたる日
 にて夫より人とする迄の苦勞心配女の親は取分けて身
 も細り姿の色も褪るとかや。娘の子を育つるは物入も
 一倍他所の娘の形振を見れば子よりも母の羨やみに協
 はぬ欲の罪作り金作りと評判されて親父は年中木綿物
 絹紬の羽織は鼠を黒に染めかへて尙ほ幾歳を木梨又兵
 衛といふ藥種屋ありとは伊勢の古市に貧乏の神風吹
 き傳へたる日傭稼ぎ親から譲られたといふものは達者
 な鴈二本の外は席疊二枚と紙帳一つガサ／＼ゴン
 くとした身代にて一生を終るも残念なりと思ひ立つ
 たが選に向ふ風が福神の守り御師の供して諸國への御
 札配り始めて江戸の上を陥んだとき世界の廣さに膽を
 潰したとへ乞喰をするとも此の土地と覺悟を定め御札
 配り終りて付て來た御師の手代に其の心を打明け金三
 兩二分と明兩掛を貰つて簞笥にも長持にもこれを世帯
 道具の持ち始めとして淺草松清町へ小さな家を借り近
 邊の寺方へ櫛の枯葉を貰ひ徳にして簞と塵取を持って墓
 場掃除に廻り其の掃きための櫛の葉を葉抹香にして賣

り始めしよりだんだん積み上げて表店へ生藥屋を出し
 稼ぐ精力に滋養扇の氏子を離れ毎年細く引伸した飴細
 工ボカンと脹た理の腹女房の産の紐穩に時は慶應初
 めの年女の子を儲けてお初と名づけ次の年また祝ひの
 帯を重ねて女を産みお繼と呼びて兩手の珠とめでいつ
 くしみしが光陰は内藝妓の線香より立つこと早く姉は
 二十姉は十九となりけるが姉妹とも色白く素直にて世
 間の人の目には十人並なれど母の目には天に生せる麗
 質太液の芙蓉とやらも是にはよも及ぶまいと藥種の名
 だけ芙蓉を覺えて玄宗皇帝様が今の世にお出ならば姉
 も妹も輩に乗り此方夫婦もよい出世を仕やうものと娘
 の顔を見るたびにどこかしがられぬ
 人の見るのを專一に形ちをつくる品つくる髪風や
 帯の模様しめ括りなき母親が涎片手に茶を入れて女髪
 結への愛想は少しも見よげに結び上げて貰はん爲めの
 鼻藥苦からずして甘へたり妹のお繼がまんがちに私し
 が先へと鏡臺直せば姉は姉だけあどなく庭を向きて
 の針仕事母は右左りに笑みかたまけお前は淨瑠璃より
 手習や針仕事が好なので自然とおどなくすんだ風
 がよく似合ふがお繼の方は三味線や踊が好だけ花美が
 移る今日はいつともより根を下げて中を少し隙かしてや

ツてと油を注げば髪結のおつがは目を細くしホントに
 此方の娘さん方は御器量がよいので下手な私しでも結
 榮が致します御存じでございませう彼の紙屋のお半さ
 んをホントに蜀黍のやうな縮れツ毛のくせに鬘を大き
 くくどせがむので一つまとめるに二時間も掛ります
 其のくせ御酒落でホントにお話しですよと薄き唇を
 翻へして同じ身分で少し張り合ひの有る所の娘を悪く
 云へば女の浅ましき身分が褒められるより嬉し氣なる
 を見なれ察しなれたの狡猾退屈果して母はニユーも
 の成程お半さんは顔立は美しくッてお出だが毛に少し
 癖がお有りなさるすゝと合す調子に音メを上げナン顔
 立が美しいどころですか白粉が雪のやうに濃いから知
 らせんが彼の下は芋畑ホントに大菊石でございますよ
 夫で福助が最負も壓が重いぢやありませんか壓が重い
 と云へばホントに重いのが有りますマアお聞なさい私
 の隣に居る何商賣だか知れない獨りものです此間相
 應の女があるから貰はないかと話しましたら生薬屋の
 姉嬢なら女房に貰つても見やうと思ふが其外なら皆な
 斷つて下さいと口巾ツたい挨拶をして餘り面が憎うご
 いますからお氣の毒だが夫は天道様へ石投げた地面
 土藏持った立派な方から御縁組の事は降るやうに申し

込んでも相應しないので御受付なさらぬのが何でお前
 達の望みが届かうとやり込てやりましたら不減口に子
 前さん斯う申しましたよ土藏や地面が左ほど貴いか
 己の胸に貯へた金はそればかりの物ではない今日積ん
 でも明日なくなるとは金と雪また今日なくて明日出るも
 金なり目に見え手に取れるものは盡るも早い己の胸
 から涌き出す金はいくら用ひても生涯盡きぬ掘ぬき井
 戸今ま蓋し當り入用もないゆゑ世界へ預けて置いて有
 ると澄して居ましたが彼の丁簡では貧乏もする筈で
 ございますよオホッホ
 手がらの裂の古いのや挿し飽た簪をばせしめし慾と二
 人前口の働らく女髪結多くの中には風俗を身だしなみ
 の相談相手近所近邊裏々小路隅の噂話に兎角もつる
 る汚れ毛を取上げて結ふ女同士櫛の齒ならで口の端に
 かゝるほどなる間違ひも出来ること有りといへば其の
 人柄に氣を付くべしと或る老人の云はれたりとか女髪
 結あつがの高話しを雪隠にて聞かうといふ木梨又兵衛
 不圖耳に入りて此座敷へ來れば主人と姪は強い敵藥お
 つがも口を閉づれば母も娘も雀原へ礫うって鑿ッてシ
 ヤンとした行儀、いつも女の寄り合ふてベチヤクチャ
 するを見て苦い顔する又兵衛が笑ましげに座を占めて

何と髮結殿今も話されたお前の裏の獨身者の事は實説でござるか而して年は幾歳ばかりかと問へばあつがは口を尖らし聞てはお腹も立ちませう僭上にも身の程知らずにも裸も同じ店借の身で此方の御娘さんならマア貰つて見ても宜いと申しましたとも申しましたとも正實にすまアして申ましたよホントに彼が奢りの沙汰とやらでござりませうよ年は二十七八ぐらゐでせうが貧にやつれて三十ぐらゐに見えます其話しが實ならナンとお前の働らきで姉娘のお初を貰つて呉れるやう其の獨身者に話しては下さらぬか勿論店借では不自由なるべければ此家を悉皆譲りて私共は世話を掛けぬやう他へ退いても宜い夫は如何とも商賣も何を仕やうとも總て其人の心任せに致すが何卒話して見て下されと云を皆まで聞もせずしてあつがは口を耳まで開て笑ひ出し且那樣はいつも御眞面目でお出なさるかはりにまたとんだ申職を云つておからかひなさる宜ろしうござりませう彼の獨身者を御簪になされたら立派な事でござりませうと腹を抱へれば又兵衛は眉を顰め是は怪しからぬ我等此年になるまで人を嘲弄する杯といふ事は夢にも致しませぬ娘が爲めによき簪をど兼ねてより存する矢先に今のお話し金儲けのことは我が胸に覺えありと

て世上の富貴を物の數にも思はぬ其人の好もしさ天晴我々が簪にして大事に娘に添はして頼みあり人はたゞ覺悟一つなり其の詞で對面せぬど其人の委細は知れたる裸なりと筵一枚なりと其等は更に頼着なし其心持つが何よりの持參物何とぞ其方の働らきで此縁談を整へて下され禮は更に惜むまじと眞顔に云ふに四人は呆れて手に持つ物を落すばかり只又兵衛の顔を打ちまゐりて暫時詞はなかりけり

第二

末の業を互の心にかけ 孟の祝言 咽喉元すきて 甘や 母親 心も眞眞疊のな い 腐き 硝子

夫の詞に女房は眼に角立て老にぼけての隠れかは知らねど假にも其様な事を云つて下さるな憫然に人並より生れ優つた娘達を人も有らうに裏屋住の其日暮し斯う云つてはあつがはさんに悪いが麥の粥さへ食ふや不食の瘵我慢に口から出鱈目の僭上は本氣の沙汰ではよも有るまい夫を此方が聞惚れして大事の娘をば遣らう貰つて呉れ杯とウカ／＼云るゝ事が有るものぞ夫も娘が不埒にてか又は縁薄くて三度も四度も出戻りの上ならば左る貧なる男持たせまいとも云はねど瑕なき璧の愛娘を瓦か石かなんどのやうにわざ／＼捨つるは親

の無慈悲これよく思ふても見て下され娘の子は殊さら
に女親の心遣ひ生れ落ちた其日から男と違ふて面貌が
大事火傷一つ痣一ヶ所有ッても形身がすばるゝ聞けば
荒い風にもあてぬやう室の梅が香かをりをば外へ洩ら
して若しヒヨんな事でもあらば御前に對し世間へ對し
て私しの落度と成長した今にても夜の目を安く寐はし
ませぬ夫に何ぞや此方一人で儲けたやうに私に一言の
相談もかけず亦肝腎の娘にも應か否かの問もなくヤレ
娘に添して頼もしいの天晴我等が聲で候のと獨極めに
臨めらるゝはいかに男の權威でも餘りでござりまする
抑や子供を有つるは最惜可愛の情合ばかり我身の榮耀
の爲めでは無けれど左りとてまた少しは末の樂みと思
ふ事も無ではないあッたら帯や花美衣裳着せて人にも
誇りたいに夜の錦の外には知れず折角の嫁入支度を皆
な無益にして其の様に負にやつれた男をば密と駕に貫
ひしなら娘が不義でも有ッたやうに評判するか又は身
代が傾むいたゆゑよい所からは來なんだかと囁される
が私や悔しい何かの時の問談合にも然どした所から
呼べば親類知音が多くして娘の身の晴れ家の爲めまた
お繼が嫁入の時の巾にも成りませうお初も黙ッて俯向
いて居ずと其様な男を夫に持つは否でござりますと判

然云や一生連れ添ふ男ぢやもの押付け業では末は遂げ
ぬ是まで度々諸方から嫁に欲しい聲にならうと云ひ込
む者は深山有ッても此方一人ッヤチャ張ッて彼も氣に
入らぬ是も心立が飲み込めぬと能い所をば皆な斷り二
十歳になるまで縁も定めず置きながら撰に撰て其様な
男ぢかも見せぬ裏屋住をどんな結構な口でも有るや
うに急にせいて話し掛け此方から手を下げて貰ッて呉
の身代を渡そうのとは何事でござりまする假令お前が遣
うと云ても此母が遣りませぬ私しが其様な聲は貰ひま
せぬと疊たゝいて叫かるゝも母親の身にては道理ぞか
又兵衛阿々ど打笑ひ咽喉もと過ぎて熱さ忘るゝとやら
其方も昔しのこと早や忘れてか我より其方が老にぼけ
たと見ゆるぞや裏屋住みの其日暮しのと口汚なうわめ
かるれど三十年前の此方達の身はどうで有ッた考へて
お見やれよき折からなれば娘共にも云ひ聞せて置くが
我等は親代々の分限者にあらず臍一本を資本にして伊
勢からの田稼ぎ土にも囁り付氣で小商を始めだん／＼
身の油に店も光りを増して今更く男女四五人を使ふ
やうになりしなり左れば裏屋住みとて生涯必らず發達
せずとは極らず又棟高き大店とていつ倒れぬとは請合

はれが貧乏は糾ふ繩の如くなれば目の前の富よりは其
身に備はる才覺といふものが貰うに過ぎるコレお婆其方
は其の心入れならば忘れしならんが己はよく覺えて居
るしかも知れ今から二十八年前の十月二十日人がまし
は恵比壽講にてヤツサツサ賑ふ中目出たい日として表
の紙屑屋の噂が肝煎て其方連れて來られしが祝言の
式にも作法にも會津塗の盆の上へ口の欠けた猪口伊丹
屋の徳利のまゝ酒を並べ肴といふては小鰻の乾物嫁御
寮の其方が手づから骨をむしつて盆の取やり酒は薄く
種の中は濃かれと紙屑屋の噂が祝ひ立に歸りけこれ
足も出るし愚痴も起ればそれを箸しなんで共稼ぎに稼
がしやれ人は末の入前が大切若い時には勤らくが藥
井戸は遠けれど水は佳し豆腐屋は朝早く來る呼聲の長
い人のを買ひなされ同じ直段で毒が大きい味噌は此處
等はすべて高ければ用の序に江戸向きの大問屋で少し
づゝなりと買ひなされ何ぞ不自由な物が有つたら遠慮
なく私しの所へ云ふてよこれよ路次の溝板が一枚斜
かれて居るに氣を付け玉へ勝手手知らぬうちは夜出ぬ
やうにするがよいぞやと懇ろに云ふて去なれた跡イ、
や娘の手前恥しうはござらぬ話して聞する心得の一つ

小春日和といへど夜に入りては建付の悪い水口より吹
き込む北風が寒かりしが其方が持つて來た木綿蒲團に
共寝して暖かに眠りしは今の身の縋子純子より嬉しか
りし其境界を直に忘れ果て二人の娘を育つるは公家高
家の姫君嫁かと思ふほどの立派つくし一本の帯十四五
圓掛け一日朝から化粧磨きにのみかゝつて世帯のこと
は教へず末は何にする心で貧乏者には嫁入せぬの裏屋住の者
でなく心まで奢つて貧乏者には嫁入せぬの裏屋住の者
では世間に見てもないの聞ともない高上り鼻がつ
かへる己が其男を嫁にせうといふ思案こそ誠に子を思
ふ慈悲といふものなれ其子細いふて聞そうお初咽喉
が渴くに茶を一つ汲んでたもれ
つら／＼世間商家の有様を見るに富貴にならんとし
て勉め勵むよりして富有の身となれどまた其富貴の
有様を自らしては忽ち傾くものなり興るときは店よ
り衰ふる時は奥よりすくし守るべきは儉の一字富
むといへども貧しきを忘れざるぞ世の味ひをよく嘗め
たる人とは云はれ又兵衛は舌を濡はせて打咳ぶき先づ
其方の心入れでは何ういふ者が娘の爲めにも家の爲め
にもよい聲と思ふうぞ大かたは身柄よく大店の二番息
子年は若く色は白く花奢にして顔立美しく立振舞しと

やかにて人中にての應對に風流な事を疎からず器用で
發明で而して支度も立派なるを望ならんがよく／＼
頭を冷たうして考がへて見やれこれは男が妾遊び物を
抱へる好みと同じでホンの一過の花心榮耀の餅の皮む
りな願ひよし其通り注文に合ッた者が有ッたにせよ毎
日ヌツベリした俳優同様の者と鼻合して小酒宴我等が
やうな身代三つ有らうと四つ有らうと忽ち底は倒まつ
もッても見よイザ身上没落といふ際に亭主の色の白い
が何ぞの足になるか美しい顔見れば貸方が帳面棄て逃
げて行か其方達の好みに適ふ所が一ヶ所有ッても小身
上一つ潰すに足りる殊に大きな處から聲を呼べば先に
合せて此方も綺羅がはり互ひに外見の僣上倒れ突合倒
れは再び興きるに難いもの其方も誠に娘を思ふ慈悲あ
らばたとへ飯は立ながら掻込み色は溢塗のやうなりと
も心立正しく商賣に才覺ある男を撰み立るがよし若い
ものは兎角面貌風俗に泥みて一生の苦を知らず夫を意
見して轉ばぬ先の杖つかすは平生杖つく老人の役では
ないか今ま話に聞く裏屋住の男は其詞のみにて面貌
も心實もよく分た其上此方の姉娘なら貰ふて欲しいと
慕ふどころお初が常から内端にて且つりしげなるを
愛てならん若し是が乙のお繼をと望む者なら耳は秋て

ねどコレ姉妹ども心にかけやるな姉は心餘れど妾は足
らず妹は風俗も優しく顔立もすぐれたれば女好みの念
のみなれば空口にも妹をど云ふべきに姉をど望むは心
有り己は其の男に娘も身代も遣る氣だが却ういふても
其方は不得心か妹も早や嫁入時なれば達ての望みと有
るならお繼は其方が見立て嫁にやられよ何方が老にば
けたか又は子に慈悲が薄いか厚いか智曉をせうお初
の心は何と思ふか己の思案と大かたは同心で有らうな
と見かへればお初は耻かし氣に父様母様詞を盡して仰
有るは皆な私し其の爲めを思ふての御慈愛いづれに愚
かはなけれども父様の御詞よう合點致しました何事も
御心任せとどとなしやかに答へたり
世に千里の馬は有れどこれを知る伯樂なしと瘦た鬣を
振るつて高嘶ひする人あれども其を云ふ通ひ用ひて見
たところが根から千里を歩まねナイラ病多し左れば此
詞は馬よりいふべきにあらず伯樂ありてこそ千里の馬
を尋ねべけれ其身が世帯の苦勞艱難した丈け木梨又兵
衛の彼の僣上云ひし獨身者を好ましく思ひ女髪結のお
つがを口入にして掛合ひしに話しは忽ち調ひて千秋萬
歳千箱の玉獻酬三盃酌は婦地口もなる口輕者にてと
んだ面白き聲の氣立何でも商人は憂顔ではゆかぬ平生

いき／＼莞爾々々ど面白く快活の氣象にあらねば福の神の御意には協はぬ勞症病が空寺の番に煙まれたやうな顔色では誰が錢を出して物を買ふべき先づ人品も氣に入つた商賣は何仕やる。仰せまでもなし生藥屋。左らば此店。イヤお譲り下さるに及ばず暖簾だけ分けて下さらば此町にて西洋藥種を商ひたき由又兵衛も然ぞあらんと満足し酒屋の跡の明家をば假初の見世出し番頭小僧七役の早變り淺草邊に寫眞師多ければ諸方驅け廻つて損の行くを堪へて喰付せに安く藥品を賣り蒸溜水などは宅で小僧の遊び仕事にもなれば別段代價に及び申さず其の代り仕上げにお使ひなされた跡の水はお捨てなさらず此瓶へ受けて御置き下され是も多く集て再び銀を分析しますと抜目なく得意先へ利をつけて廻るに皆な此男を最負にし顔が賣れるに品物も随ひ追々店も取擧げて片言の西洋語も頓智よければ商賣用だけのお茶を濁し清く正直なるをトレードマーク(商標)にして賣買するに西洋人の信用を得て寫眞器械や藥品ばかりでなく時好に投じて利益ありと見るものは外商より内證にて先づ御身一手捌きにて賣つて見よ景氣よくして跡注文の出る時は此の半價にて積み込めば外の者が直に眞似て手を出しても其の約定品が來

るまでには十分に甘い汁を吸ふならんと向ふから品を預けて掛引の注釋まで添へての商賣仕合せの風吹き付ける港入り新奇の品は此處を最初に見本を送り思ふがまゝの利益も一時かぎりの不深切ぶつたくり儲けはせず買方よかれ賣方にも品を擔がせず其身は車を廻す高麗鼠のグル／＼廻り子に子が殖て今は横濱長崎にも支店を儲け坐ながら四方の商勢を察し新聞に目を離さず今度斯ういふ器械が發明になつたそうだと世間では噂のうちに早や見本取り寄せて配るといふ働らき儲も佳き駕取すました又兵衛の隱居商ひも夫婦安樂に過るだけは有馬の温泉。伊香保の湯。入前のよい老の慰み孫が欲しやはばかりは金錢より儲けにくい働きの足らぬ事よと戯れられぬ

第三

よき一對の虫ばみの羅夫婦
酒事の樂しみは後の熱燗
さるけて暗い心のない蠟燭貰

離祭り人形天皇の御宇かどよ古しへは姉さまごとの遊びにて奢りがましき事もなかりしが是れはこれ女兒に烹飪の事を教ふるものなりとか男女配合の事を知らしむるとかむづかしい文句をつけて子女は付たりで一つの大人の斷そびとなり善盡しまた美を盡し是より奢

りの道を開き彼いふ帯を買つて下さりなくしては生て居ても詰らないと空腹を堪へて態と二日も絶食で鬱いで見せると母親は驚いて彼ほど欲しがるもの買つてやツて下され男の子の悪いのを持つて放蕩をさるゝから思へば何でもござりませぬ私しの一生の願ひどうぞ取ツてやツて下さいと泣き付かれて見れば親父も左様は首が振り切れず以來はなりませんよ一鉢お前が甘過ぎるからツヤクをいッて困りますと叱言半分可愛半分帯一本出来れば是をまたひけらかしたく今度の千歳座は大そう面白いといッてお向ふのきいさんも横町のいさんも見て来てお話しですから是非連れて行ッて下さい彼れが見られないくらゐなら死んだ方がよい位だと力なげに溜息して見れば娘は一鉢内氣の質若し詰らない氣でも出すと取り返しになりません病氣が出て醫師に禮をすると思へば大した事はない夫に今度は安だと云ひますから斯ういふ時に見せて置きます方が却つて徳でございますよといづれも母親が同類になつて内外よりの強願を頑然として却下すれば何となく家内面白からず妻や子の不吉の顔色と睨めくらするも家計の障と盛々芝居行を許せば今度は花見ヤレ頭の物ソレ着物と母親の樂みが先に立ッてマンマと浮氣に仕立て

上げ卒嫁入となれば一代の花の盛り立派にせんと若い者が祭りに出る格で競ひかゝり兎角身代に蟲喰をつけたるものなり木梨又兵衛の乙娘も繼は殊更母親の奔走子なるうへ姉娘を詰らぬ者に嫁入せられたればは何卒身柄よき方へ縁付けて世間の人にも羨まさんと夫をせびり自分の隣縁り金も縁り出して一層美しく飾らせ方縁日開帳などに連れ廻るうち或る人の媒酌にて土脈の棟高く聳へし兩替屋へ縁付き定まりしが其の夫となるべき人は年二十四にして兩親なくまた怖い顔の番頭や乳母の古いものもなく其うへ男振りは俳優の家橘に似て諸藝に通じ座配りなしとどやかなるのみならず横文字もチト讀めて法律の解釋もなり所謂粹で公道で人柄で金の力さへ添ッて居るとは近ごろ牡丹餅で類。口が巾ツて悦びも云ひ盡せず此様な縁が唐紙のをしや姉娘も斯ういふ所へやらうものど母親は夢中にて我が嫁入りするほどいそ／＼せられ親類縁者もよき一對の雛夫婦目出たし／＼と祝さたり金の指輪を箱めた手に米は磨げず五分珠の珊瑚を戴いた頭は自髪にも仕にくし兎角奢りには奢りが付くものにて一事に通へんとして萬事の費へ果は絶頂ヘトリ詰めて是から如何したら宜からうといふ身になる者多し

乙のお繼が嫁入たる兩替屋は見かけこそ立派なれよく
身上の内幕に立入りて見れば百方仕組の入くんだ螺旋
仕掛カラクリの糸一本切れても其まゝ働らきの止むほ
どな危なさも先代宅兵衛熟練の繰り方に種も尻尾も現
はさずヤンヤと喝采を得たりしが當主多次郎は生半熟
の教育が邪魔になりて氣ばかり風船玉の如く浮はく
と上に昇りブツと取澄して家業に身を入れずいつも月
夜に米の飯焦げやうと焦げまいと勝手は知らず貰ひ當
た美しい女房志かも品川樓の金龍に何處やら面ざしが
仰て夫で此方は華仕立でない二羽重細工張り合ふ客も
なければ外に間夫が有らうといふ氣遣ひもないを箱入
のまゝ毎日眺めての小酒宴茶屋の拂ひといふ野暮な事
を聞かぬ廊遊びも同じこと嗚呼我ながら果報者よと頭
をたいて鼻毛を伸し毎日合衆車で見物遊山と洒落こ
めば番頭若い者もつくねんと眞鍮の煙管に齒形をつけ
て目ばたきばかりして居るも無益しとそろ／＼稽古所
入りから湯屋の二階番にくだわり掛けだん／＼大げさ
にサツサ出かけると浮れ出した帳尻の合はぬを合する
筆の先もごまかし盡して番頭は隨德寺を極込みしに多
次郎は始めて驚き此の不埒者めと怒って見たが受人ど
て身分なき者なれば千圓近くの引負を辨へやうとは云

ザゴツタ返すうち番頭が居ないやうでは波の家運命
も分かつた倒れぬうち早や取れと預け主貸方は一度
に店へ繰り込めばこは面倒と若者は元より下女と通じ
合ッて居たか共に荷物を先へこかして給金の前借を路
用に在所の相摸へ驅落とふざけ小僧の親も此の様子を
聞いて必竟大事な子を手離して奉公さするも商賣の道
を覺えさする爲めなるに左る亂行なる御家では悪い事
の教授を頼むも同じ事黒く染らぬ白地のうちに取戻す
が肝腎と何か名をつけて無理に暇をとり／＼に出て行
けば廣い家に若夫婦と小女一人が／＼として晝から鳥
でも泣き出したいたい有様になり貸方は嚴くせがむ借方は
よこさずお繼は親許へ駆け込んで二百圓ほどの合力に
急場は一時凌いだが跡を盛り返さん手術もなく飽かれ
ぬ中を夫婦別れお繼は親の家に居るも面目なしと或る
華族方へ奉公に住み込みたり
立御の字を付けた目出度づくしの祝ひの聲はまだ耳に
残り紅白の水引包み潮も落ちずに結んだまゝなれど縁
の結びは早や解けて多次郎はだん／＼の零落身上と
共に心までが曲みて俳優のやうで有た顔も忽ちに妖魔
の下司地獄の世話をして分一を取らうといふほどに
成り下りて行方も定かならずなりぬ。人は豫じめ是で

儲かるといふに必らずといふ字は付けられねど正直に稼ぎて約やかに用ふれば何處でか其の必らずといふ字に打付かるに相違なし姉嬢お初の聲は身上仕出して後にも更に奢りがましき事はなく朝も雇人より先に起きて店の戸を明ければ起よと差圖せねど朝寢する者はなく向ふ三軒兩隣はまだ夜の分にして燈明の有るうちに此の店の前は掃除届きて打水もしつとりし打まけの水溜をこしらへて通行人を煩はさず深切丁寧といふ事が諸事萬事に付て廻れば得意も安心して商ひ物の外の品までを注文するほどになりて日々の繁昌夫を始め雇人達の忙がしう立働らくを見てはお初も蒲團に尻を腐らして神と話し居られず上草履で臺所へ出れば自然と常綺羅も飾れず殊更勝手向きの總勘定を托されて一々の出し入れ小遣帳つけるに追はれて三日目に廻る髪結を四日目五日目と伸すほどの一事が萬事無益の物入はなく月々の總計に云々殖えたいふを聞くが何よりの樂しみと習はうより馴れた世帯氣或日橋場邊の親類へ下女を供につれて見舞に行きし歸り日は暮れかゝる小雨は降り出すたしなみの頭巾冠りて蝙蝠傘に横しぶきを凌ぎ雷門まで來ると御内儀さんお安くと人力車夫が付くを幸ひ我住む間まで合乘五錢といふと宜し

うございます少しお待ちなさいとその車夫は外の車夫を呼んでコッ合乘四錢だが行くか行くか夫なら御内儀さんは五錢にきめて有るから蠟燭賃一錢よこせナンダ夫は酷い酷きやア廢せ外にいくらも行人が有るコマルとは何だグズ云ふな一錢なきやア御内儀さんに出して置いて貰ひやナ彼所まで四錢ならお前達にやア宜い仕事だモシ御内儀さん此男が行きます氣を付けてやツて呉んぬエと際どい所で一錢頭を張る狡猾さ憎い奴めと不圖見れば這は如何に妹お繼の聲たりし兩替屋の多次郎なればハツと思ひしが先は一向心付かず仲間の車夫より一錢取つて意氣揚々と立ち去るにお初は偕るくど涙を溢し偕る末の知れぬは人の身と水の流れ是に付けても父の教訓夫の深切空に思ふは冥加なしと心のうちに手を合して拜みしとかや斯くてより尙は一層夫婦の間に愛敬ありて樂しき事をば重ねけるとぞ

五の巻

第一

目を睨いて見る夢ばく然たる空想
 炭も金剛石も種は同トさん
 閑な儘では呑込め安煙草の富國論

自分で自分の重畳は知れずと誠に其の如く自分で自分

の運命も豫知しがたし知れぬで持った世間なれどまた
 知れぬために自暴自棄し福の神へ尻を向けて好んで遊
 園扇の連中に入る者多しこれ銀行紙幣を屏風の下張に
 用ひ正宗の銘作を鹿柴切りとすると同じにて最惜しく
 もまた勿体なきことにあらざや或人の歎息されしは
 尤も至極秀吉も木下藤吉郎といひし頃にはマサカに大
 閤殿下と稱さるゝまでにお盆を起さうとは思ひもよら
 ざりしならん米國のグラント將軍が自ら其生涯を記せ
 しものゝなかにも顯榮富貴斯ばかりの高地に昇らんと
 は始めに夢にも見ざりしと云はれたり抑も人の榮達は
 一は天資一は勉強一は際會の三拍子揃ひの半天股引腹
 掛け大工を業とせし兄いが府知事となりし話もあれば
 尻切草履でボクシヤクと紙屑を買ひし者が居附地主の
 日那となりし例もあり人は自ら思ひ棄ず源水の廻す獨
 樂ならねど只辛抱が肝腎と知るべし或る會社の受付を
 勤めし猪飼新吉といふ男あり或る夜會社に宿直して獨
 りツクチンたる退屈まぎれつら／＼我身の經歷を考へ
 また現在の地位を思ひ而して將來を推量るにアラ頼も
 しな身のの上やな／＼に頼みいろ／＼に錠り足を
 運び手を廻はして漸く一昨年の暮より七圓の月給にて
 爰に住み込み今年わづかに八圓に昇給し是より上は先

づ二三年月給の増す當はなし親父の所へ三圓の食料を
 入れて湯錢鬻刺の小遣が一圓若い身なれば偶々には無
 分別も起らぬとは我ながら請合はれず三度に一度牛屋
 の付合また夏冬の身の廻り止せばよかつたに苦しい思
 ひをして煙草まで呑み習ひ是も今では青臭いので我慢
 したところが月に二十五錢足らずは入る夫是差引極
 決着に積りあげて月に一圓四五十錢しか残らず是を十
 年無事に積み上げたところが二百圓には届くまい二十
 年目で四百圓として今が二十七なれば人間わづか五十
 年まで獨身で骨を折つて漸く五百圓の主になるかなら
 ずとは情けない話だ思へば／＼はかない事だと壁に向
 ッて溜息をフツと吐き出したうちに貧乏の氣が離れた
 か俄にまた頸を振りかへイヤ／＼人間の一代は左様し
 たものでないテ善惡ともに斯う豫算通りには行かぬが
 多し何も生涯五百圓叩きばなしと己の身の上が三世相
 に書てあるといふ白痴な理屈でもあるまい売馬に怪我
 なし裸参り追剝に逢ず是より損の仕やうなければ一番
 身軀を働かしして儲けの道へ取掛ツて見やう何も三井
 鴻の池の先祖が皆な大學者でもなければ力持の大關で
 もあるまい奮發して此の明治の年代に名を止めんと俄
 に立つて足を踏みならし一人部屋をばうろつきぬ

各々志ざしを言ふこと論語にもあり腰に十萬貫の錢を
 提げて市をぶらつき片端から買たいとの望みも皆な出
 来ない相談にしてホンの一時の戯ふれなり左れど戯言
 も思ふより出づ慾で充ちたる人間なれば時計の針の一
 動きする間も握りたいと思ふたいの念離るゝ時なし此の
 念凝ッて髣髴と夢か現かまぼろしか眼の前にちらつき
 て捉らんとすれば水の月猿にも劣りし迷ひあり退けた
 る跡の宿直に残りし二人はさして詰らぬ下手將基にも
 飽きて伸びをしながらオイ高根君遅々文明開化して今
 に條約も改正になり否でも内地雜居と来るだらうが其
 時向ふの奴等は數百萬の大資本を振り廻して大げさな
 事を始めるに相違ないところで我が人民が是に抵抗し
 て大工業を起さんと力身だ所が肝腎な丸印しが北海道
 の地名ではないがタリナイと来ては大きに凍けて仕舞
 ふわけだが我輩の思ふには會津が青森あたりでドシド
 シ出る金鑛を發見し金貨を無暗と鑄造し夫を資本に大
 工業を起したら天下の富を我邦に集めることも容易い
 譯だと思ふ北海道あたりにも盛んに出る銀鑛が一つ欲
 しい左様すればメキシコが盛んになつたやうに保護を
 加へずと自然に北海道が都會の地になるからと自分の
 家の庭でも作くるやうな注文を出せば高根は首を左右

に振りまた其様な事では碧眼赤髯の強物を壓倒す
 るといふ譯に行かぬドン／＼出る金鑛銀鑛も欲しい
 が千圓掘探るに九百圓費用が掛るやうな事はまだない
 僕等の考へでは何處でか金剛石の大きいのをドショと拾
 ツて一つ五六萬圓つゝにも授けて手も滞らさず米諸
 國の金を一億萬圓ばかり引たくり夫を資本に海も埋め
 山も殖し鐵道も作り電線も引き長足進歩二三年で素ら
 しいものにしたいたいとは是も眼を明きながら夢を話すこ
 ろへ彼の受附の猪飼新吉が來り此の話しを聞いて打笑
 ひ雨君とも滅多無性に慾心が有る中に否に愛國心を加
 味するから可笑い何もそんなに愛國がらずと慾が有る
 なら有るまいに正しい道を踏んで慾を渴き玉へ一個人
 が富めば社會は富むのだ身をよく愛すれば即ち國を愛
 するのと同じ事になります人は只思つたばかりではど
 んな結構な事を思つても更に世に功用はない思つたら
 直に鋤らきに顯はす事サ金剛石が拾ひたければ草鞋が
 けで秩父の山へでも探しに出たまへ金鑛發見坐ッて居
 ては覺束ない我輩も大きに感ずる所が有ッて急に大金
 持になる積りだが左様決着したら我ながら直に金持に
 なつたやうな心持がすると肩いからして詭き誇るに二
 人は腹を抱へけり

猿の尻笑ひとや新吉の言の先を折りて高根は打笑ひと何處の演説會で聞いて來て其様な假聲を遣ふのだ二人の話しもお前の望みも囁言くらべは僕に裁判を頼むより外はない然し出來ない相談でも斯うして考へるだけの自由と樂みがあるところが入間の面白さといふもの實正に大金持となると何だ彼だと面倒で樂みの割には苦も多いが空想は其處へ來ると心配がなくて結局氣樂だと云ふ新吉は打消し是は高根さんの御説とも存じません空想といふものゝ貴といふのは幾らか實地に似寄せて立派な普請をする下圖のやうなものなればこそなれ全で世の中とかけ離れて飄箒の中から馬が飛び出すやうな事では空想ではない妄想で何の役にも立ちません私しが大金持ちになろうと思ひつゝいたのは先づ繪師が圖をなす前に燒筆でザツと書いたのと同じで本物ではないが往くゝは其の通りの圖を大着色で書き上げたる積りです今ま俄に百萬圓の身代にならうといふのは少し口に巾るやうですが其の心で若し一錢儲け得れば即ちはや百萬圓のうち一錢だけは出來たので跡九十九萬九千九百九十九圓と九十九錢足りない分の事なれば全くの妄想でもございませんのサ先づ早速空中樓閣の地形固めに取掛らうと思ひます何をしやうとまだ思ひ

付きはありせんが何分お引立を願ひますと眞顔で云ふに二人は眉を顰めお前本氣でいふのか本氣なら御沙汰止みが宜からうぞ可成資本もあつて其道に馴れた者すら此頃は商賣を止めて纔かでも月給を取つて小暮さうといふ中へ何も仕覺えた事もなく又資本も左様云つては悪いが十分に足らないお前が一時の熱に取のぼせて飛び出して見たところが想はしい事はないから又いけなからと今度改めて六圓でも七圓でも取らうといふのはなかなかむづかしい現に今手に取つた七圓の月給を棄てまだ何をしやうといふ覺悟も決さぬ商賣に掛るは危ないものではないかよく考へて見なさいと深切な言に新吉は頭を下げ誠に有難い御異見決して空には存じません然し私も商ひがなければ其日は物を喰はずとも一番やり通すつもり商賣も是といつて金の掛ることは出來ませんが叔父の知人に炭問屋がございますゆゑ是へ頼んで荷を借り諸方心安い所へ無理に押付て廻り尤も大安にして始めは輕子だけで得意を擴め少し形づくるとやうになつてから店を出す積りでござりますと眞の話しに夜は更けて一時を打つに驚いて其部屋々々へ別れたり

第二

足に草鞋はきくとした商ひ振
肩に天秤あててやひなる踊り姿
つくくを見る飾羽振掛羽子板

一事一業を成さんと思ひ立ちなば必らず成すべし左ら
ずば死あるのみ中途で止むること有るべからずと立派
に我心に誓ひて思ひ立つ人は多けれど耐忍といふ肝腎
の心棒が中途で曲よりしてよく前言に背かぬは稀な
り猪飼新吉は會社を暇を取りて叔父の家へ戻り思ふ仔
細を打明けて相談のうへ會社より貰ひし恩勞金十圓は
どを炭問屋へ身元金に入れ其身は草鞋掛けにて朝疾く
より會社の人々の家を廻り先づ兎も角も試みに取ッて
見て下さいと一二俵づゝ無理に置いて廻り下女が水を汲
んで居ればオット我輩が汲ませう此の美しいのに水
を提げさせるは勿躰ないと申戯口に嬉しがらせ御坊さ
んの厭の糸目かしこまつてお札手を申しお嬢さんが家
根へ上げカ羽根は日に塵の入るを遣へて箒で落し世事
と愛敬をふりまいたうへ炭は祇に問屋卸し並にて一日
に十五銭も口錢あれば叔父の許へ雜用を拂ひても湯錢
ぐらゐはあるゆゑ先づ三年は是れを仕通し得意も殖え
問屋の信用も得てから店を出さん千尺の樹は一日に伸
びず此が人間の辛抱どころと毎日草鞋を着けぬ事なく

足に任せて駆け廻りしが得意先にて近ごろ炭屋が疲
猾にて口ばかり大きくて中には薪の燃さしのやうな
のを入れて有るを押付けて行くに此の新吉の持つて來
るは山方の確かな品を撰いで來るゆゑ目方増しの大き
な石などが入ッて居ぬを悦び夫から夫れと云繼ぎて退
々賣手擴になり今は月に十二三圓づゝの利益ありて
一人の肩では擔ぎ切れぬほどになつたに安心し此の様
子なら大勢が勤めて呉れるから女房を貰ッて小さな店
でも出して見やうか左様して見世でも商ふと大分都合
がよいがどそろゝ大きな志しの氣が抜けて是で澤山
の情心が出かゝつたゆゑ我ながら是ではならぬと氣を
取直し時しも十二月の十七日雪催して寒けれど風がな
いゆゑ觀音の市に人が出るだらう賑やかな所を何と
く押し返すもいろゝ様々な人の有様を見てまた勇氣
を振ひ起す藥石と夜食を日舞ふて直に市へ出かけ鐵道
馬車はあれどさしたる用もないに乘るは奢りと諸方の
店の景况を見ながらガラガラと淺早へ來て押されるま
まに仁王門を過ぎ兩側の羽子板屋を見ると一軒へ立止
まりて二圓五十錢といふを一圓に負けよと押し問答を
するは一杯機嫌の四十ばかりの男その連は二十一二の
意氣な年増に十四五の娘にて二人の女が取まいてチャ

ホヤするに新吉は羨しげに眺め居たり
 人に羨まるゝは悪き事なるに求めてその羨みを買ひて
 得たり顔をなす者は抑もいかなる心なるやと或る上人
 が高座を扣いて説法されし其の人さへ目もまばゆき
 金襴の袈裟かけかまひなき出家さへ外見を飾るは取も
 直さず人に羨まるゝを以て身の樂しみとなすものなる
 べし袋草市の羽子板店に立止りたる女連を見るに羨み
 の心起りて新吉は歎息し長い浮世に短かい命すでに此
 の秋脚氣を踏み出して二三日寝た時には最う此世の御
 暇乞ひかと思つた大きな了簡でやる處までやつて見や
 うと勵むものゝ途中でバツタリ倒れては根から有難く
 ない話した見れば左のみ利口さうでも無い男たが金の
 威光で美しいのに取まかれ此世からなる極樂遊びエ、
 草鞋と天秤棒に何時離れる事だと言らない譯だ咽喉
 を渴かせて居る折しもアレ盗人が年増は汚濁男はキ
 ヨロつくうち人込の中を潛つて二十五六の職人風の者
 が飛び出す襟首を掴へて太い野郎だ一所に來いと引立
 れば親方世忍して下さいと盗みて紙入を投げ捨て人に
 まぎれて逃げ去りたれば新吉は拾ひ上げお取られなす
 ったのは是でございますかと差出せば年増は小腰を屈
 めどうも誠に難有うございます貴方御禮を仰有つてと

振向けば連の男は新吉の形を見て最と横柄にイヤは
 忝けなうござつた御禮と申す譯ではござらぬが一寸其
 處まで御迷惑でも御一途にと愛想添へての勤めに否か
 もならず地内の小料理屋へ伴はれし此男は八右衛門
 とて或家に番頭役をつとめしが主家没落の時に際し
 太夫に輪をかけて自分の懷中へズリ込み担は皆な主人
 にかづけてよい頃に身を退いてかくし置いたる金を資
 本に人形町邊へ葉茶屋を出し空米相場へ掛りしに惡
 運つよく二三千圓贏ちたるより身の程しらぬ奢りが付
 て踊の師匠付たりの阿娜者に想をかけて毎日の物見遊
 山されども女は左る者にて悪く僭上はる憎軀男金有
 ればこそ人も用ふれど一つ踏み外せば見せ物の木戸番
 もならぬ風俗こんな者に身をまかせては一生の腐りと
 胸を括つて帶を解かず只口前で面白可笑く文なす綾に
 からまりて岸へも着かず沖へも出ず漂ふ船のかひなき
 船と知らず白痴をつくし漁先の見こせぬ浪煙り傍目
 いどゝ氣の毒なれど具の當人は不知火の焦るゝといふ
 も氣が強しと何處へ出るにも妹を風除に連れ行くなり
 どか新吉はしたゝか馳走になりしうへ失禮ながらと紙
 述べ合ひて右と左りに別れたり

商ひをするに誰と誰とを相手と人を限るべきにあらざ
一軒も餘計に顔を賣り一人も多く知る人あれば夫だけ
に商ひの道が廣きなり世間が廣いといふ事は何業に拘
はらず肝腎の事なれど取わけて商人には資本と信用に
次ぎての要件昔しは桃李言はねど下自ら蹊をなす品物
をよくして直を安くすれば招かれども自然と客が來
ると取澄して居る事もあつたが競争のはげしい今の世
界にては自然といふ字を待つやうではまだるし種々の
工風さま／＼の思ひ付きをなして多くの人に知られ多
くの人を對手とするが第一なり新吉は思はぬ功名の馳
走酒に酔ひ折まで提げた千鳥足新堀端を獨り言。久し
く飲まづに居たので少しの酒で大層酔つたチラツク眼
の故が知らぬが何だかチラ／＼と雪が降るやうだオ、
寒くなつた福井町まで歩いては歸れさうもない其處等
に車があつたら三錢ばかり奢るとしやうと呟きながら
來かゝる後ろより先刻はよく仕事の邪魔をしたな其返
禮に跡をつけて來たと云ひさま一人の男が打つて掛る
を酔つてはあれど油斷せず身をかはして腕を捕へれば
曲者は振り放し逃げんとするを蹴倒せば曲者は前へ倒
れ其身は後ろへヨロ／＼とし足を踏み直すうちはや四
五間逃げたるが折よく巡查が向ふから參られ盜賊とい

ふ聲に隙さず角燈投げ棄て曲者を引捕へたる所へ新吉
が駆けつけ云々との申立てに兎も角もと警察署へ連れ
られしが何時の間にやら新吉は右の腕へかすり疵を負
はせられて居たれど左したる事ならねば手拭にて結は
ひ既に淺草觀音の境内にて此奴が人の物をスリ取ると
き知らせれば仇をするとかいふ事は聞いてゐましたが
ミス／＼盗みを働くを見て黙つてゐるのは自分が盗み
を許すやうなもので此様な事は少しの恐嚇が怖いどて
捨て置ては悪者の變るばかりですから直ぐに引捕へた
ので盗んだ品を出して遁げ去りましたが其の返報に傷
を負はさんとしたのでござりませうが是ばかりの疵は
何でもござりませんと勇々しき詞に掛りの方も賞され
曲者をだん／＼調べられると何とか片名のあるスリと
の事に直ちに其筋へ送りになりしが此事に新吉は二日
ばかり掛り三日目に一軒も得意を殖さんとの心得ゆゑ
櫻炭を二俵擔ぎて人形町通りの彼の葉茶屋へ尋ね行
きしに其家は昨日戸を閉めて仕舞つたその事ナンボ商
人の身代は知れぬといつても餘り早い變りやうだと肝
をつぶし此まゝ歸るも知恵がなしと踊の師匠の家を聞
きて尋ね行きぬ
壺中に天地を收むる仙人。ありし昔しの話しは雲をつ

かむより當にならず千里を目前に寄する眼鏡。今見れども珍らしとせず土一升金一升田舎でいはい馬にて乗り廻はしても一日かゝるほどの廣場が買へる價にて僅に猫の額ほどな地所も賣る者なき都下の繁昌百萬人と積りしは籍を置いて落付た人の數諸國より入込む人と出る人の數を合はさば彌が上に重なり合はぬが不思議なり斯る都會に住む人は地代の高きを恐るゝが故方は十坪に足らぬ中へ玄關客間臺所次の間俱部屋庭の隱二階の屋根は物干に用ひ緑の下を洋犬の住ひとし松は塀を越して外に千歳の色を伸べ竹は軒を過ぎて内に凌霜の影を掩ふ竹田近江のつもり細工か何ぞ夫れ狹き中にして緩やかなる結構をなすや飛驒内匠が墨繩を打ちしかいかんぞ斯く短かきを以て長しとするや上手に工夫し巧みに建築するも地所を惜みし自然の習はせ始めて地方より山しものは先づ此の普請の有様を見て其地價の貴きに驚くとかや取り分け蠣殻町近邊の横道に入りてはみづれも曰くある格子戸作り粹と云ひ氣取りといひ入口を庭にして裏口を却ッて表門と脊を腹にした鮎帶解るやうにて解けやらぬ世辭愛敬の御し問屋環りの師匠お辰といふ表札の字からして讀め衆る妹と二人の寡婦暮し是れに定る主なきは可惜の通用を寢かしもの

にして融通せぬ無益な事だと呟やく商人また垣越に姿を見て天物を暴殄す誠に歎ずべしどうめく書生もありそ海濱の眞砂の數多き客に靡かぬ柳腰何處かまつかりした所ありと見えたり晝間來る女弟子の三人四人歸しあどおたつは庭の障子を明けて下女を呼び頻りに差圖して何か木の根を藁にて包ませしが思ふやうにならぬとてアレサ下手だ私しが拵へるよ庭へ下り立つ折りしも此處へあぶれた櫻炭を擔いで新吉が寒さうな顔で頻りと表札を見ながら來りしがお辰の顔を見て急に笑を作り今日は先夜は誠に御馳走様になりまして誠に有難う存じます一寸此邊の得意まで炭を持つて参りました次手ながらお禮に上りましたとヘタクサお辭儀をすれば外らさぬお辰オヤ先夜スリを捕まへて下すつたお方でございますかマア此方ハサア何卒私共こそお禮に上らなくてはなりませんのをツイ手前にかまけましてサアお上り下さいよろしうございます其處へ炭をお下しなすつてもオヤまことにおそれ入ります何より重寶なお品をありがたうござりますと言葉よどまづ廻べ立つるけふりたまかれて新吉は座敷へ腰を落ち着けた

第三

悪の報ひは的の外れた矢筈の譯號
金の光りは紋も襷も弓張の提灯
晦日に高枕福神の居心も宵の早起

寒さ凌ぎに一杯と世辭を着に取敢ず酒を出されて呑む
口ゆゑ云はるゝと足を洗ひ尻を下して小座敷へに
おりゝり今日は實は旦那のお宅をお尋ね申しましたの
でござりますが急に閉店との事に驚いて夫からまた此
方へ伺ひました一鉢全軒どういふ譯で左様急に店をお
閉めなさるやうになりましたかと問ふに辰は左も氣
障だといふ顔付きをして金純子のカマス煙草入れを指
にて弾きながら店を閉めるのが當然です少しでも鼠
負になつたお方を斯ういつては濟みません彼が彼の八右
衛門といふ人は全軀胸のよくない人で或る家に此間ま
で手代奉公をして居て其家が潰れ掛つたのを異見して
直さうとはせず年若の主人を能いやうに包めて身上を
掻き廻し自分の方へ取り込むだけ取つていよく分散
といふ間際に親父が急病でて暇を取り上州邊へしばら
く行つて居てスツカリ其家の一掃が濟んだところ東京
へ来て米相場へ手を出したのがマアお聞きなさい其様
な悪い人でも運の向くときは別なものと見えて五六度
續けて當つたので急に旦那顔をして藝妓買ひなんぞを

始めて私共へも時々來て成上りの癖とて否に横柄で
ち金さへやれば文句はないだらうなんて打ち撤て氣障
な事をいふものですから妹なんぞは憎がりきつてゲヂ
くから考へて矢筈さんと綽名を付けるも御當人はそ
んな事は無我夢中だもんですから己が相場場で當つたか
ら矢筈か是奴はどんなに宜いツサ呆れるではありません
かさういふ無面目ですから高慢ばかり云つてもお金と
なるど汚ないの私共は一途に出て行く先によッ
て面皮を欠く事が度々でした夫で手前さん店は張ッ
てあるものゝもどく相場場で勝つたお金ですから澤山
はないものと見えて二三人連中を組んで調規則に背い
た賣買ひをしたとかで此間の晩の翌朝捕つて怖い所へ
送られたのです夫だからバタ／＼と家を閉めたのであ
りませうオヤ話しに取られてお煙が出来すぎました貴
方の右の手はどうかなさいましたかと心直そうに眉を
擡めるに新吉は嬉しくなりナニ少しばかりの疵でござ
います然し彼奴等は悪く祟るものです斯うばかりで
は分りますまいが此間の晩拘捕めが歸り途に侍伏せし
てゐる新堀端で此疵を付けられましたか直ぐに引續ま
へて巡査に渡しました。オヤマアそんな事まだお痛み
なさいいますか。イヤ痛みは忘れしました今まで疵咎めを

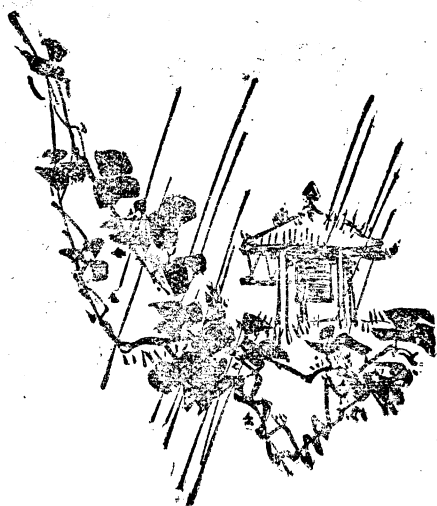
した事のない身軀直に直りますのサ。其のお怪我も私しゆゑ誠に濟まない事でございまして本綿の裂れでは擦れて痛みはしませんか是になさいとしなやかなる心は絹より手ざはりよく思はず額に手を加へぬ愛情といふものは嗚呼氣の毒だと思ふ心あるより一層の度を増すものにて踊りの師匠も辰は我身のためにスリを捕へてくれた恩人が其の爲に手疵を負ひしと聞ては氣の毒にもあり且はまた其時の働きも甲斐々々しく詞つきもキツカリして外見を構はず稼ぐといふ所に心を付け遅かれ疾かれ夫を定めねばならぬ事なれば斯ういふ頼もしい働きのある人に身を任せ苦樂を共にせんものと思へば心の底を明け何れとなく待遇して近所へも得意をつけてやりたれば新吉は魂天外に飛んだ仕合せ毎日のやうに炭を擔いで此處へ來たが果は身形を飾つていろ／＼物など贈るにぞ或る日辰は諒めて云ふやう不圖した事より御懇意になり互ひに外見も内所の事を打ち明けて語る中なるに左様隔てがましく御心配下さるは無益といふもの殊に一日でも半日でも稼業をお休みなさるやうでは嬉しくございません千日に付けた得意も一日に失ふことあるは稼業に精ど無精どやら私しも兼てお話し申した通り妹の身さへ片付けば

お否でも一途になり彼様な稼業をしたものゆゑ裏面に世帯は持てまいと世間の噂にかゝらぬやふ身を捨てて共稼ぎにする心なれば貴君も弛みなく氣を張つて商人の中の商人と云はれるやふになつて下さひと男まさりの詞に新吉は耻ぢ入り少しめかし掛けた情け心を去り元の通り形に構はず足には草鞋肩には天秤ゆくりどは鼻息もせげに驅け廻れば辰は喜びて其前より話しのあつた駿河臺の或るお邸へ妹をば奉公ともなく食客ともなくお嬢様のお相手に差し上げゆくはお邸にて然るべき所へ片付けて下さるべき約束なれば是は安心と家も道具も皆な賣つて新吉と夫婦になり新吉も是まで稼ぎ溜めて叔父に預けし金あり問屋の信用はあり得意は多くすれば辰の金と合せて八町堀川口町邊へ土藏付きの賣店を買つて引移り始めて陣を張つて旗上げせしが活計向きから留守の間の店の用はお辰が切つて廻はし新吉は昔しに變らず荷を擔いて雇人は一人あれど夫にまかせず稼ぐ肩に福は止まつて僅かに半人ほどの内に居なりに地所を買つて置場を擴げ藏も塗り替へて本磨きの光りを増したる店の繁昌昨日まで花美を盡くせし踊りの師匠もかはれば變る世帯女房打つも舞ふも一人の氣配り三味線ひく手に算盤のたまさか

ならでは化粧もせぬと心の美しさは珍らしい方と主人の陰口よくは云ひながら下女小僧までが悦びぬ實に夏來ては錦にも優る麻衣袖まくりして夕ぐれ方の河岸涼み晝の暑さを忘るゝばかり新吉は團扇を手にして、盤盃を前へ御して小鯉を拵らへて居る魚屋と何か打語らふ折から刷毛目縞の單物の古くして近よれば一種の臭氣あるを着た男がうそくど此家を覗き顔で突と店に入れば新吉は薪の注文にやと忙がはしく此家へ續いて入るに其の男は挨拶もなく店へ腰を掛けて此方の内儀さんに少し御目に掛りたくて参りましたと云ふは見た顔とつく／＼見れば彼方も腹を定めオ、お前さんは観音の市で逢った人諸はと云たざり何か胸に思案の様子新吉もハ、ア此奴ははぢかれの八右衛門例の矢筈先生だ此の汚ない形で内儀さんに逢ひたいと捻ぢ込んだは昔の事を云つて幾許かいたぶつて行く心か左もあらばあれ何程の事が云はんと煙草盆を前へさし出して鹹にお珍しい三年前の歳の市で御目に掛りたざりでしたナお辰やお前の御馴染の方がお出なすつたと呼ばれて誰ぞ今時分忙がしいにと夕飯持らへに濡れた手を前垂で拭ひながらお辰は店へ立ち出て見れば虫の好かぬ八右衛門否な奴がと思へど外らさぬ顔で挨拶す

れば八右衛門はオイお辰さん久しぶりだ優しい手で一服付て下さい世話女房になつてまた一段器量が上つた御亭主といふのは淺草市で逢つた御方大かた斯うなッた行立も分つたが未練らしく何も云ふまい己も相場の外れ地道を踏まぬ横筋違詐偽を鳥の黒仕立で赤い仕着の其の果は場所へも顔が出されぬので大坂堺と廻つたが弱り目に祟り目に脚氣の上に濕を病み仕方がなさにまた元の此地へ歸つて様子を聞けばお前は此方へ巢を換へて昔しにまさる上景氣一年や二年世話になつても厄介とは思ふまい身體の癒るまで置いて下さいとゆすり文句にお辰は柳眉を逆立て云ひ争はんとするを押し止め新吉は紙幣を五圓紙に包み成程昔しの好みぬるお世話も申したいものだが見られる通りのガサツな商賣お前さんも居心がよく有りますまい是れはホンの心ばかり伊香保へ湯治とも行くまいが鶯溪の支店あたりで二三日養生なさるが宜いとははらかに云れて八右衛門も左程強くもねだられず是は大きに御喧しうございましてと禮を述べ見かへりがちに立ち去つた跡を眺めて新吉は歎息し昨日の大盡今日の乞食只心掛けの一つのみ嗚呼人は悪い事は出来ぬものだ云ひたるが八右衛門は其後貰ひし金も忽ち遣ひ捨て竊盜を働らき

しにぞ再び鎖に繋がれたり
新吉夫婦は富んで驕らず稼ぐにいよく福神の御座
所となり川口町様と町名で呼ばれ定紋も弓張で人が



覺え毘沙門龜甲も前兆か何でも稼げばあの通りと商
人の手本にされ目出度巻を重ねけるとぞ

博文館十周年紀念臨時增刊
太陽 第三拾貳號 終

本號ニ
 限リ 定價金卅八錢

太陽定價

每月二日
 五日廿日發兌

版權所有

定價	冊	金	稅
一冊	(三百頁以上)	拾七	内地郵稅
六冊	(三ヶ月分)	九拾八	一冊三錢稅
十二冊	(半年分)	壹圓九拾	外國郵稅
廿四冊	(一年分)	三圓七拾	歐洲十錢稅
			北米七錢

注意(本誌ハ前金ニアラサレバ一切發送セズ●前金切レ候節ハ直ニ
 逕送テ止ム●郵券代用一割増ニテ五厘壹錢切手ニ限ル

廣告掲載料

三等(五號活字
 廿四字詰)

一行金三拾錢

全廿四行
 六十四行

一頁金拾九圓貳拾錢

一等 一頁金廿三圓〇四錢
 二等 一頁金二十圓拾二錢

發行所

電話本局
 三百三番

博文館

東京市日本橋區本町三丁目八番地

編輯人 岸上 操
 發行人 大橋新太郎
 印刷人 愛敬利世